松江市東淵寺古墳の埴輪について（補遺）
－出雲市上塩冶築山古墳の埴輪との比較を中心に－

池　淵　俊　一

1．はじめに
2．分析の方法
3．東淵寺古墳出土埴輪の検討
4．上塩冶築山古墳出土埴輪の検討
5．両古墳出土埴輪の比較検討
6．考　　察
7．おわりに

1．はじめに

松江市大庭町に所在する東淵寺古墳は古墳時代後期の出雲東部を代表する前方後円墳であり、平成23年～26年度にかけて範囲確認調査が行われ、平成27年度に報告書が刊行されている（島根県教育委員会2016）。

たまたま整理作業を担当することになった筆者は、当古墳出土埴輪の整理を進めるにあたり埴輪を専門とする島根県古代文化センターの田中大氏から意見をうかがい、当古墳の埴輪が出雲市の上塩冶築山古墳（以下築山と略す）の埴輪に類似するとの教示を得ていた。実際の築山の埴輪資料を熟覧する必要性を感じつつも、諸業務に忙殺されて目的を達することができず、ようやく実見をはたせたのは報告書原稿入稿後の２月初旬のことであった。

出雲弥生の森博物館の坂本豊治氏のご配慮で初めて築山古墳の埴輪の実物を目の当たりにし、思わず息を呑んだ。そこには、数時間ほど前に目にしていた東淵寺古墳の埴輪と瓜二つの埴輪が存在していたのである。試しにスケールを入れた刷毛目の写真を撮り、勤務地に戻って早速東淵寺古墳の埴輪刷毛目と比較したところ、見事に一致したのである。

両古墳は古墳時代後期の東西出雲をそれぞれ代表する首長墳であり、両古墳の埴輪刷毛目が一致する事実の重要性は大きいと思料された。しかし既に報告書原稿の入校後のことで大幅な訂正をすることはかなわず、総括に図面を１面追加して今後の研究の必要性を喚起するにとどまった（池淵2016a）。

前置きが長くなったが、本稿は報告書中では検討を行うことができなかった東淵寺古墳の埴輪について改めて分類を行い、当古墳埴輪の実態把握を試みる。そのうえで、築山古墳出土埴輪に関しても同様な分類・検討作業を行い、両古墳の埴輪資料の比較検討を通じて、６世紀後半における出雲の埴輪生産体制の一端にアプローチを試みてみたい。その上で、今回の検討で明らかにされた事実が、今後の出雲における古墳時代研究にいかなる影響を与えることになるのか、若干の予察を行うことによって報告の責めを塞ぎたいと思う。

2．分析の方法

（１）出雲における近年の埴輪研究動向

出雲における埴輪研究は編年研究を中心に長い蓄積があるが（井上1983・藤永1997、椿2008ほか）、こと古墳時代後期の埴輪に関して言えば、最近は基底部再調整の技法変化が議論の中心となっている（熱田1989、大谷2003、山内2003など）。特に大谷晃二・山内英樹らによる基底部再調整の研究は精緻な観察と埴輪の製作実験に基づき技法復元を行った優れた業績で、それに基づく編年観は当地における現在の円筒埴輪編年の基準となっている。

一方、田中大は基底部再調整技法に偏重する当地の埴輪研究に警鐘を鳴らし、畿内など他地域の埴輪研究成果を積極的に取り入れつつ、畿内のⅣ群及びⅤ群埴輪との比較から改めて当地の後期埴輪の再構

築を試みている。特に規格の問題など当地の埴輪研究に新たな視点を提示した点は注目される（田中2012）。

（２）分析の手法

今回両古墳の埴輪を検討するにあたっては、刷毛目を基軸に据えた分類・検討を試みた。これは今回の検討の契機が両古墳の埴輪間に刷毛目類型の共有を見出したことに端を発しているが、それ以上に両古墳の出土資料のほとんどが破片資料であって、破片資料を対象に分類行為を行う際に、最も普遍的に取り上げることが可能な属性が刷毛目であったという資料的制約の事由に基づく。

埴輪を分類する際に刷毛目に注目する研究は早くから存在するが（轟1973・川西1977・藤沢ほか1991・樫田1992）、盛んに行われるようになったのは、犬木努によって埴輪同工品分析手法が整備され、その分析の際の基礎的ツールとして用いられるようになってからである（犬木1995）。犬木や城倉正祥らを中心に進められた関東における埴輪同工品分析研究においては、各古墳及び特定地域における埴輪生産組織の復元が試みられ、大きな成果をあげている（犬木2005・城倉2009・小橋2005など）。近年では関東以外の地域でも、刷毛目分類を取り入れた同工品分析が各時代の埴輪を対象に盛んに行われるようになり、多くの成果をあげている（廣瀬2000・2007・田中2013・井上2011など）。

今回の分析も基本的な方法論はこれら同工品分析の先行研究に倣って行っているが、その分析結果は似て非なるものとなっている点を予めお断りしておく。というのは、一般的な埴輪同工品研究は、個体識別を経た完形に近い資料を対象とし、各古墳に樹立された埴輪製作体制の構造的理解を行うことに主眼が置かれてきた。この場合、刷毛目分類は同工品を峻別する際に用いられる多数の属性のうちの一つにすぎない。過去の研究においては刷毛目工具の共有や兄弟工具の事例が多数報告されており（廣瀬2000など）、地域や時期によって刷毛目類型と同工品との対応関係に違いがあることが指摘されている（加藤2012）。このように刷毛目パターンの異同は同工品識別の一義的な分類基準とはなり得ず、他の個人的変異を示す多くの属性との検証によって同工品の認定が可能となる（犬木1995）。

しかし、本稿においては、まず一旦刷毛目で分類したうえ、その分類単位が同工品となり得る有意なまとまりとなるかどうかを他の属性で検証するという手順をとっている。このため、今回の分類結果は各類型が等価値の分類単位とはなっていない。ある刷毛目類型に関しては、他の複数属性との検証により同工品と認定できるものも存在するが、別の刷毛目類型においては、それが他の複数属性による検証ができないため同工品の認定までは至らなかった類型も多数含まれている。さらに、個体識別作業を経ていない破片資料を対象としている関係上、当然のことながら同じ分類の中に同一個体資料が多数含まれている点にも留意が必要である[(1)]。

以上の点を念頭に置いたうえ、実際に分類された単位に対して具体的な評価を行い、分析を進めていきたい。

３．東淵寺古墳出土埴輪の検討

（１）古墳の概要と対象資料

松江市大庭町に所在する東淵寺古墳は４カ年にわたる調査の結果、６世紀後葉に属する前方後円墳であることが判明した。正確な規模は明らかにし得なかったが、周辺の地形などからみておおよそ67～70ｍ前後に復元される（島根県教育委員会2016）。調査は墳丘西側を中心に松江市教育委員会が実施した調査もあわせて十数ヶ所のトレンチ調査が行われているが、古墳全体から見ればごくわずかな部分にすぎない。

今回分析対象とした資料は、既報告分のうちある程度刷毛目パターンが読み取れる資料を対象とした。このため、単独で類型設定が可能である資料でありながら、刷毛目が不明なため分析対象から除外した資料も存在する（66-6など）[(2)]。なお、今回非掲載資料を改めて確認したところ、表面の摩滅が進行し刷毛目パターンが判別できる資料は皆無であったため、現状で分析対象に耐えうる資料は概ね今回の分

析対象分に限られる。

（２）刷毛目工具の分類

ａ．刷毛目分類の方法

刷毛目類型の設定にあたっては、藤沢敦の方法に基き（藤沢ほか1991）、各個体又は個体間のハケメをつなぎ合わせ、できる限り各原体の復元を試みたが、両古墳の資料は基本的にタテハケが主体であり、おおよその原体幅が確認できたのはヨコハケを用いている一部の類型にとどまる。

刷毛目工具の原体幅については、先学の研究事例によると、時期差・地域差の問題もあろうが、タテハケ用の原体では概ね５～８㎝のものが多いようである（小橋2005・井上2011・埴輪研究会2006）。このことから、概ね４㎝前後の原体幅が復元できて他の刷毛目類型と重複を持たないものについては独自の類型として取り扱った。また、十分な原体幅が復元できない場合でも、極めて粗い木目パターンなど明らかに独自の木目パターンが認識し得る事例についても独立した類型として扱った。このため今後の原体復元の進展によっては変更される余地がある。

既に述べたように、刷毛目工具には同一母材の打ち割りによって生じた同じ木目パターンをもつ兄弟工具の存在が指摘されているほか、同じ刷毛目工具でも「表と裏」「先と元」の関係により、全く逆の木目パターンが出現する（犬木1995・城倉2009）。ある刷毛目パターンが、同一工具によるものか、別の兄弟工具であるのかを峻別するのは断面形態の観察で可能な場合もあるが、当該資料の場合は遺存状況から非常に難しい。このため現実的な方法としては、刷毛目の照合・識別作業を通じて同一の木目配列のものを刷毛目パターンとして一旦類型化したうえ、次のステップとして他の属性との検証から同一工具なのか兄弟工具なのか、又は同一工具の正逆の関係なのかといった問題を個別に検討するのが捷径と思われる（廣瀬2015）。

なお、今回の刷毛目の異同の検討は任意撮影法（犬木2005・2013）によって行っているが[3]、実際の照合作業の際には完全には一致せずに若干のズレが認められる場合があった。過去の研究事例にも、同じ類型として図示されている事例の中にズレが生じているケースが散見される。この場合、こうした誤差が埴輪の乾燥・焼成又は器面に対する刷毛目工具を当てる角度など埴輪製作時の条件に起因するものなのか、またレンズの歪みなど計測時の誤差によるものなのか、はたまた兄弟工具の使用や工具の使用端面の異同など工具に起因するものなのか、にわかには判断できない場合も多い。今回の検討では、全体の刷毛目パターン幅に若干のズレがあったとしても、全体の木目配列が完全に一致する場合には同一類型として取り扱った。ただし後述するk1・k2類のようにズレが大きい場合（８～９％前後）は別類型として処理している[4]。

ｂ．刷毛目分類の表示

刷毛目分類の表記にあたっては、樫田誠の研究（樫田1992）に基づき、木目（条線）の太さと密度を表記して示す[5]。また一つの刷毛目パターンにおいて、刷毛目原体進行方向に対して主体的に出現するパターンを正、その180°逆で稀に出現するパターンを逆と呼ぶ。なお、刷毛目の写真には原体端部を▲、各刷毛目の端部を△で示した。

ｃ．東淵寺古墳埴輪の刷毛目分類（図版１）

刷毛目ａ類（48-1、48-2、48-3、55-3、55-10、66-2）

48-1を標識とし、T2で３点（おそらく同一個体）、T3とT6・7でそれぞれ２点出土している。２㎝内に12～14本を数え、約４㎝幅を復元した。進行方向中央やや右寄りに中の条線２本セットがあり、その右に極細パターンが1.2㎝前後配列され、左に中細～細の配列が２㎝以上配列される特徴的な木目パターンで、識別は比較的容易である。

刷毛目ｂ類（55-1）

T3から出土した55-1のみである。密度は７～10本／２㎝前後、中～極太で構成される比較的粗いハケで、現状で4.9㎝幅を復元できた。後述するｃ類によく似ているが、木目配列が異なる。

刷毛目ｃ類（56-1、66-1）

56-1を標式とする。密度は７～11本／２㎝前後、中～極太で構成される粗いハケで、Ｂ類に類似する。右端に極太帯があり、左に行くにつれ漸次条線が細

表１　東淵寺古墳出土埴輪　属性表

類型	個体番号	規格	口縁	突帯	突帯貼付技法	刷毛目工具	色調	胎土	基底部再調整	スカシ	外面調整	口縁部内面調整	備　考
A	48-1	3条	B	M上1b	やや雑	a	5YR6/8橙	少	タタキ1段左	横長	縦ハケ	ナデ	突帯下沈線
A	48-2	－	－	M上1b	－	(a)	5YR6/8橙	なし	－	横長	縦ハケ	ナデ	48-1と同一個体か
A	48-3	－	－	M上1b	雑	a	5YR5/8明赤褐	なし	－	横長	－	ナデ	48-1と同一個体か
A	55-10	－	B	－	－	a	5YR5/6明赤褐	なし	－	－	－	ナデ	
A	66-2	3条	B	M上1b	やや雑	a	5YR5/8明赤褐	なし	－	横長	縦ハケ	ナデ	ヘラ記号有 突帯下沈線
A	55-3	－	B	－	－	a	5YR5/8明赤褐	少	－	－	－	横ハケ	
B	55-1	2条	A	M下2	突帯上割付凹線	b	5YR5/8明赤褐	多	タタキ2段左	横長	Bヨコ	横ハケ	
C1	56-1	2条	－	M上3	丁寧	c1	5YR5/8明赤褐	多	タタキ2段左	大型	断続ハケ	斜ハケ	
C2	66-1	2条	D	台1	丁寧	c2	5YR6/8橙	やや多	－	縦長	断続ハケ	斜ハケ	
D	55-4	3条	C	M下3	丁寧	d	5YR5/6明赤褐	少	－	－	－	凹線	口縁部長12.6cm
D	55-5	－	C	－	－	d	5YR5/8明赤褐	少	－	－	－	凹線	55-4と同一個体
D	55-7	－	B	－	－	d	5YR6/8橙	多	－	－	－	凹線	口縁部長12.7cm
D	55-12	3条	－	M下3	丁寧	(d)	5YR6/5橙	微	－	横長	Bヨコ	－	
D	56-4	(3条)	－	M下3	丁寧	－	5YR4/8赤褐	微	－	横長	Bヨコ	－	
D	56-6	(3条)	－	M下3	丁寧	d'	5YR4/8赤褐	微	－	横長	Bヨコ	－	外面ハケはD類逆 （A類正と一致）
D	66-8	3条	－	M上1b	雑	d'	5YR5/8明赤褐	微	－	－	Bヨコ	－	外面ハケはD類逆 突帯下沈線
D	66-10	－	－	(M下3)	雑	d	5YR6/8橙	微	－	横長？	－	－	
E	55-2	2条	D	台2	丁寧	e	5YR6/8橙	少	－	－	断続ハケ	ナデ	
E	66-3	－	D	－	－	e	5YR5/8明赤褐	なし	－	－	－	横ハケ	
E	66-7	(2条)	－	台1	丁寧	e	5YR4/6赤褐	微	－	－	－	横ハケ	
F	55-11	－	B	－	－	f	5YR6/8橙	少	－	－	－	横ハケ	
G	66-13	形象	－	－	－	g	5YR4/6赤褐	なし	なし	－	－	－	
H	55-6	－	D	－	－	h	10YR6/6明黄褐	なし	－	－	－	ナデ	ヘラ記号？有
H	56-5	－	－	台3	－	h	5YR5/8明赤褐	なし	－	－	Bヨコ	斜ハケ	外面黒色塗布？
I	66-9	－	－	M上4	－	i	5YR5/8明赤褐	なし	－	－	Bヨコ	ナナメハケ	外面還元色

くなる。断面が追柾目状（横山1978）のレ字状になるのが特徴である。東淵寺資料では3.4cm幅程度しか復元できていない。

刷毛目ｄ類（55-4、55-5、55-7、55-12、56-4、56-6、66-8、66-10）

55-4を標識とし、T3から６点、T6・7から２点出土している。密度は18～19本／２cmで、細～中で構成される。東淵寺古墳資料では6.2cm幅が復元でき、右端は原体端部が確認できている。原体右側は中の条線で構成され、左に行くにつれ中細・細が主体となる。左端付近には中の条線２本セットの左に極細パターンの存在が確認できる。

刷毛目ｅ類（55-2、66-3、66-7）

55-2を標識とし、T3から１点、T6・7から２点出土している。密度は16～17本／２cmで、４cm幅を確認できた。条線は細～中太で構成されるが中が主体となる配列である。Ａ類に比較的類似するが、極細帯が出現せず、ａ類とは明瞭に区分される。

刷毛目ｆ類（55-11）

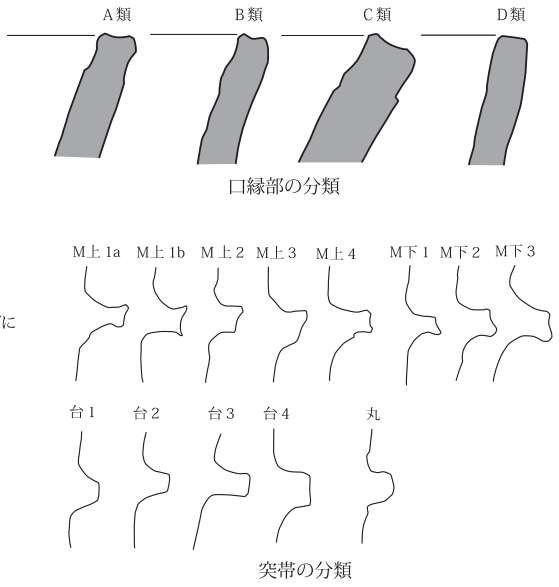
55-11の１点しか確認できていない。刷毛目密度が６～７本／２cmの非常に粗いハケで断面レ字状を呈する。

刷毛目ｇ類（66-13）

66-13の１点のみが確認できた。密度は10本～16

【属性表　凡例】

①埴輪の規格
　２条３段と３条４段、形象埴輪に大別
②口縁部端部の調整
　Ａ類：口縁部の上面及び内外面を、親指・中指・人差し指を用いて丁寧に撫で、それぞれ凹面を形成するもの。
　Ｂ類：口縁部端部の３面を撫でるが、凹面は上面と内面のみで外面には平坦面を形成するもの。
　Ｃ類：口縁部端部の三面を撫で、外面に段を形成するもの
　Ｄ類：断面台形でナデによる凹面が明瞭に形成されないもの
③突帯の形状
　Ｍ上１：断面Ｍ字で上向きに突出して突帯幅が比較的狭く、突出度の高いもの。断面形態で二つ（Ｍ上 1a・Ｍ上 1b）に細分する。
　Ｍ上２：断面Ｍ字で上向きに突出し、突帯幅は中程度で突出度が中程度のもの。
　Ｍ上３：断面Ｍ字で上向きに強く突出し、突帯幅は中程度で突出度が中程度のもの。
　Ｍ上４：断面Ｍ字で上向きに突出し、突帯幅は中程度で突出度が高く、突帯下にナデによる段や稜を形成するもの。
　Ｍ下１：断面Ｍ字で下向きに突出し、突帯幅が狭いもの。突出度は低～高を一括。
　Ｍ下２：断面Ｍ字で下向きに突出し、突帯幅は中程度で突出度が高いもの。
　Ｍ下３：断面Ｍ字で下向きに突出し、突帯幅は広く突出度が高いもの。
　台１：断面台形で突帯上面はほぼ垂直をなし、突帯幅は中程度で突出度が低いもの。
　台２：断面台形で突帯はやや上向き、突帯幅は中程度で突出度が中程度のもの。
　台３：断面台形で突帯はやや上向き、突帯幅は狭く突出度が高いもの。
　台４：断面台形で突帯上面はほぼ垂直をなし、突帯幅は広く突出度が低いもの。
　丸：断面形が丸みを帯び、明瞭な稜をなさないもの。
④突帯貼付手法（判明するもののみ）
　割付凹線：突帯貼付前に割付凹線をめぐらすもの。
　丁寧：突帯貼付後に突帯下端を丁寧に横ナデするもの。
　雑：突帯貼り付け時に突帯下端のナデ付けが不十分なもの。
⑤刷毛目工具
　刷毛目工具については東淵寺古墳・上塩冶築山古墳を合わせて通し番号を付ける。ダッシュ（'）は逆がその個体において主体となるものを示す。
⑥色調
　色調についてはマンセル表記に基づく。同一個体中で色調が変化する場合には代表的な色調を併記する。
⑦胎土
　胎土中に含まれる白色塊（長石・石英ではない。凝灰岩由来の鉱物か？）の量を相対的に表記する。
⑧基底部調整
　タタキ２段左：円柱状または板状工具工具により基底部を２段（上；横、下；縦）にわけてタタキ調整を行い、下段が左上がりのもの。
　タタキ２段右：円柱状または板状工具工具により基底部を２段（上；横、下；縦）にわけてタタキ調整を行い、下段が右上がりのもの。
　タタキ１段左：円柱状または板状工具工具により基底部を縦方向１段でタタキ調整を行うもの。
　＊なお、タタキが十分行われていないものは分類末に「粗」を追加する。
　倒立ハケ：基底部再調整で最終的に倒立刷毛目調整を行っているもの。
⑨スカシ
　形状と大きさにより分類する。
⑩外面２次調整（２・３段）
　Ｂヨコ：Ｂ種ヨコハケ状の連続的なヨコハケを施すもの。
　断続ハケ：断続的なヨコ・ナナメハケを施すもの。
　縦ハケ：２次調整にタテハケを施すもの。
　ナデ：板状工具又は指頭により最終的に撫でるもの
　一次ハケ：一次タテハケのみで２次調整がないもの。
⑪口縁部内面調整
　横ハケ：口縁部内面にヨコハケが主体となるもの。
　斜ハケ：口縁部内面調整がナナメハケが主体となるもの。
　ナデ：口縁部内面を最終的にヨコナデ主体で仕上げるもの。
　板ナデ：口縁部内面を最終的に板ナデで仕上げるもの。
　凹線：口縁部内面をヨコナデ又はハケにより調整後、凹線風のユビナデを数条めぐらすもの。



＊資料番号は報告書中の番号を示す。報告書の略称は以下のとおり。
東淵寺○：島根県教育委員会 2016『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書』
築○：出雲市教育委員会 2004『上塩冶築山古墳』
築古○：島根県古代文化センター 1999『上塩冶築山古墳の研究』

第１図　東淵寺古墳・上塩冶築山古墳出土埴輪の属性分類

本／２㎝で、4.9㎝幅を確認できた。原体左端から右にむけて中太→中→細へ漸次的に変化する特徴的な配列を呈し、断面は比較的対称的な蒲鉾形をなす。

刷毛目ｈ類（56-5、55-6）

　密度が12本／２㎝の密度で、細～極細によって構成される配列でａ類に近い。配列の特徴に乏しく、同定は困難である。現状で1.8㎝幅しか復元できておらず、ａ類など他の刷毛目類型の一部の可能性も否定できないが、現状ではどの類型とも一致しないためここでは独立類型として扱った。

刷毛目ｉ類（66-9）

　T6・7から出土した１点のみで、2.8㎝幅を復元し

た。条線の密度は16本／２㎝前後で、中～細を中心に構成され、極細も存在する。

以上、当古墳出土埴輪の刷毛目については、９種に分類した。他にも遺存状況が悪く提示できなかったが、別類型を示唆する資料も存在する。

（３）その他の属性の分類（第１図）

刷毛目以外の検討属性として、①規格、②口縁部、③突帯、④突帯貼付技法、⑤色調、⑥胎土、⑦基底部再調整、⑧スカシ形状、⑨外面調整、⑩口縁部内面調整を取り上げた。各属性に関する分類の詳細については属性表の凡例図（第１図）に譲り、ここでは特に説明を要する部分についてのみ記す。

口縁部

口縁部は断面形態によってＡ～Ｄ類に分類した。口縁部端部は基本的には親指と人差し指、中指で端部を挟んで撫でることによって最終的な整形を行っており、その際の指使いの違いが断面形状として現れている。なお、Ｃ類はヨコナデだけでなく何らかの工具を用いて段を形成した可能性もある。

突帯

断面形（M字・台形・丸）と突帯の向き（上・下・垂直）、突出度及び突帯幅を組み合わせて分類した。工人の癖が現れやすい属性であるとともに、突帯の向きは製作技法にも深く関わっており、工人集団を反映している可能性が高い。バリエーションも多く、同一個体内でも変異があって十分にまとめ切れていないが、都合13種に細分した。

なお、突帯の向きが上を向くのか下を向くのかは、突帯貼り付け時の埴輪の位置に起因する場合が多い。つまり、突帯上面を親指、外面を人差し指、下面を中指でヨコナデする場合、正位で突帯貼付を行えば上向き、逆位で行えば下向きとなる。

この点で、突帯下向きの円筒埴輪は、作業工程途中で倒立させて粘土積み上げを行う、所謂倒立技法（樫田1992）との関連が想定されるが、同様な特徴を持つ55-1などを見る限りにおいては外傾接合は確認できない。後述する築山44-26のような例もあるので一概には言えないが、当古墳の突帯下向き資料については通常の成形技法に基づいて製作された可能性が高い。

当地の古墳時代後期における一般的な２条３段埴輪の製作工程を復元した場合、粘土積み上げを一度に行うＣ群成形技法（藤井2003）によって成形されたとの仮定に立つならば[6]、①正位方向での粘土紐積み上げ、②正位で一次ハケ、③突帯貼付、④倒立させ、基底部を円柱状工具によるタタキ調整、⑤正位に戻し、２次調整ハケ、⑥正位でスカシ穿孔・口縁部ヨコナデ調整という製作順が想定され、製作工程中に埴輪の天地が数回入れ替わる。つまり先述の突帯下向きの円筒埴輪は③を既に倒立させた段階に行ったものと想定され、その意味で先述の倒立技法とは区別して考える必要がある。所謂倒立技法の場合は通常の製作技法による製品とは埴輪の系統差として大別すべき差異と言えるが（樫田1992）、今回対象とした両古墳の突帯の向きの違いは、製作技法体系の差と言うよりも、むしろどの小工程で倒立させるのかという、工人又は工人集団レベルでの癖を反映している可能性が高く、その点を考慮しつつ具体的な評価を行う必要があると考える[7]。

突帯貼付技法

突帯貼り付け前と後の技法に大別される。貼付前凹線は突帯間隔設定技法に関わるものと思われる（田中2012）。また突帯貼付後の技法については貼り付け時のナデの丁寧さで細別した。

基底部再調整

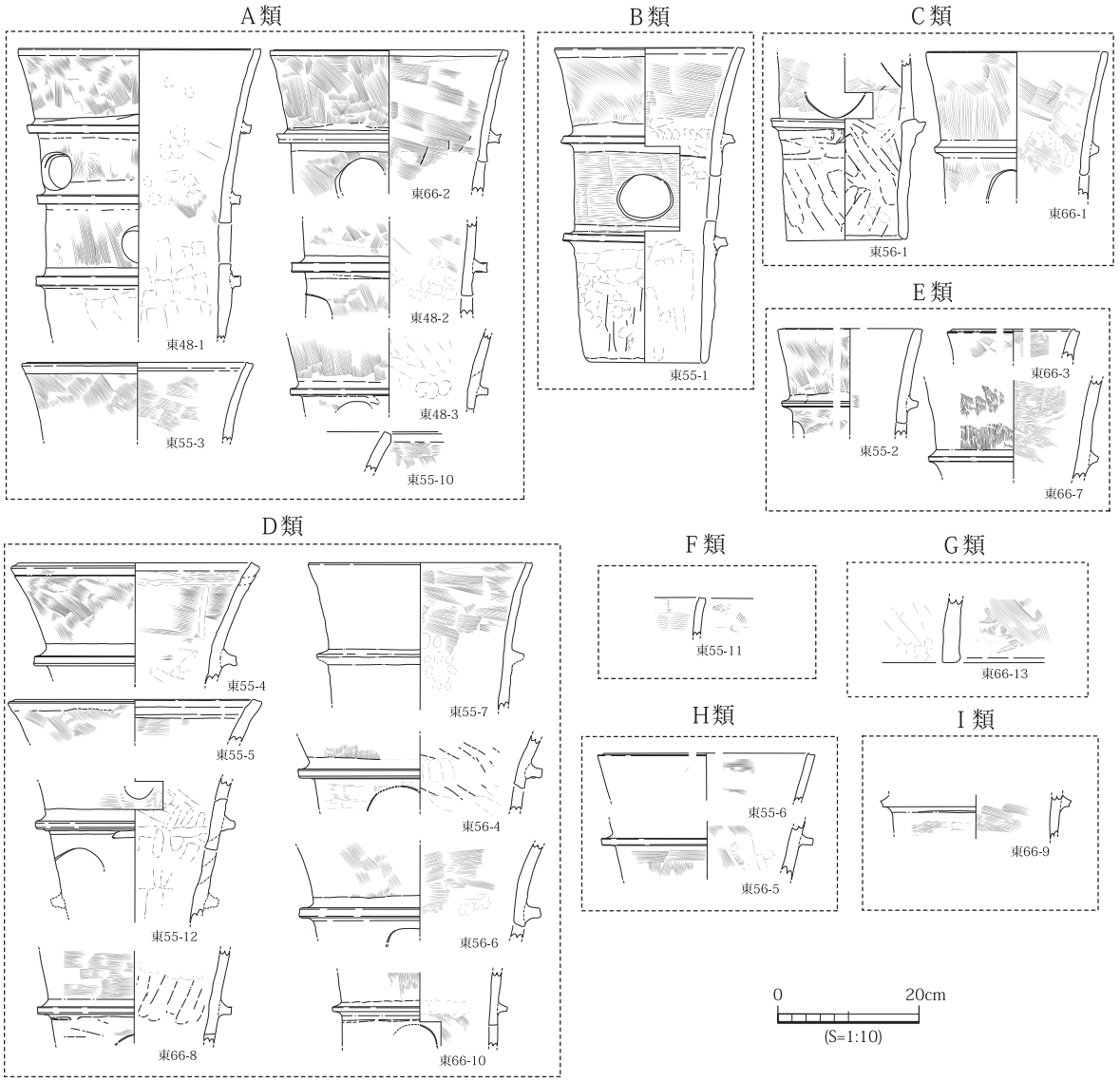
当地の古墳時代後期埴輪の基底部再調整については、大谷晃二らによる詳細な検討があり（大谷2003・山内2003）、それに基づき倒立ハケメ調整と円柱状工具によるタタキ調整に大別し、後者は工程によってさらに細別した。

外面調整

ここでいう外面調整は胴部（２・３段目）の調整のことを指す。２次調整の有無で大別し、２次調整はハケの連続性と向きで細別した。２次調整は調整範囲でさらに細別が可能であるが、対象資料の遺存状況の問題から今回は一括して扱っている。

口縁部内面調整

ハケ調整主体かナデ調整主体かで大別し、ハケ調



第２図　東淵寺古墳出土埴輪の類型

整のものについては、ハケの方向やハケ調整後の凹線状のユビナデの有無でさらに細別した。

（４）各刷毛目類型の検討（表１・第２図）

各刷毛目類型ごとに各属性の相関関係をまとめたのが表１である。なお、築山古墳も含め、今回検討対象とした資料においては同一個体中に複数の刷毛目類型が存在する例は確認できていない。この表に基づき、それぞれの刷毛目類型が同工品的類型としてまとまりを持ちうるものなのか、個別に検討を試みる。

東淵寺Ａ類

３条４段規格の大型品である。ほぼ全容が分かる48-1以外は破片資料で比較すべき属性に乏しいが、いずれも赤色系の色調を呈し、口縁部はＢ類、突帯は細くて突出の稜がシャープなＭ上1b類で統一されている。外面調整は２次タテハケで口縁部内面もナデを多用している点で斉一性が高い。以上の点から、刷毛目類型ａ類は同工品類型とみなしてよいと思われる。

東淵寺Ｂ類

55-1の１点のみである。２条３段の赤色系で凝灰岩由来の白色塊を多量に含む特徴的な胎土の個体である。口縁部Ａ類で突帯は下向きのＭ下２類、外面調整はＢ種ヨコハケ状の連続的ヨコハケ、口縁部内面にはヨコハケを多用する。以上の特徴をすべて満たす個体は他の類型には存在しない。さらに当類型

には突帯間隔設定技法の凹線が確認されるが、当古墳出土埴輪の他の類型では確認できていない。

以上の点から当類型を一つの同工品類型とみなすことは妥当と考える。

東淵寺Ｃ類

刷毛目Ｃ類としたのは56-1と66-1の２点のみだが、両者の木目パターンは幅２㎝程度しか一致せず安定性に欠け、別類型の可能性もある。また突帯は56-1が断面M字なのに対し66-1は台形で一致せず、スカシ形状も異なる。外面調整や口縁部内面調整など共通点も存在するが刷毛目類型が不安定なこともあり、ここでは別類型のＣ１類、Ｃ２類として扱っておく。

東淵寺Ｄ類

３条４段の大型品でいずれも破片資料であるが今回の調査では最も多く出土している。色調は赤色系で胎土に白色塊を若干含む。口縁部は外面に段を設けるＣ類が特徴である。55-7のみは外面に面を形成するＢ類であるが、個人内変異属性（犬木1995）と見なしても大きな問題はない。

突帯は大振りで丸みを帯びた下向きの特色のあるM下３類でほぼ統一される。外面調整は確認できる資料はいずれもＢ種ヨコハケ状の連続的ヨコハケが施され、口縁部内面にはヨコハケ後に凹線（ユビナデ）をめぐらすのが特徴である。

唯一の例外は66-8で、M上1b類で突帯下に沈線が存在する点でＡ類と共通するが、刷毛目類型と外面調整がＢ種的ヨコハケである点から一応Ｄ類として扱っておく。後述するように刷毛目ｄ類は刷毛目ａ類と正逆の関係にあり、66-8はＡ類とＤ類の親縁性を物語る資料と言える。

このように刷毛目ｄ類は、口縁部形態や突帯、外面調整及び口縁部内面調整がほぼ共通することから同工品と見なしてよい。

東淵寺Ｅ類

３点が確認できたが、いずれも小片で各属性の相関関係が十分に検討できない。色調は赤色系で口縁部は顕著な凹面を形成せず断面矩形を呈するＤ類、突帯は若干異なるがいずれも断面台形の点では共通する。口縁部内面調整に違いはあるが、口縁部や突帯形状が共通する点からここでは同一類型として扱っておきたい。

東淵寺Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ類

Ｆ・Ｈ・Ｉ類型は各類型とも１、２点しか確認できておらず、いずれも小片で属性間の関係が把握できないことから、類型設定は保留する。ただＧ類は１点のみの出土ではあるが、今回の調査で出土した埴輪では唯一の形象埴輪の底部資料であり、円筒埴輪とは異なる工人によって製作された可能性があることから独自の類型として設定しておきたい(8)。

東淵寺Ａ類と東淵寺Ｄとの関係（図版４上）

ここで刷毛目ａ類（以下刷毛目を略す）の東淵寺Ａ類とｄ類の東淵寺Ｄ類との関係について検討を試みる。

図版４上には刷毛目ａ類の逆位とｄ類の正位を比較した接写写真を示した。これを見るとわかるように両者の刷毛目パターンは約３㎝幅で一致しており、両者が逆逆の関係にあることは間違いない。問題はａ類とｄ類が同一工具の「表裏」または「先と元」（犬木1995）を使用したことによって正逆の関係が現出しているのか、それともａ類とｄ類とは同一母材を「打ち割り」（藤沢ほか1991）などによって生じた別の工具であるのかという見極めである。この点について、若干検討してみたい。

まず、ａ類を使用する東淵寺Ａ類とｄ類を使用する東淵寺Ｄ類は、同じ３条４段の製品ではあるが、口縁部や突帯、調整の特徴から全くの別工人による製品とみなしてよい。ａ類とｄ類が同一工具であったとするならば、この場合異なる工人が刷毛目工具を共有していたことになる。

関東の同じ後期古墳の埴輪である下総型埴輪の場合、一古墳の埴輪においては原則的に刷毛目工具を一人の工人が占有的に使用している場合が通例とされる（犬木1995）。一方、畿内の前・中期古墳の埴輪においては、しばしば別類型間で刷毛目パターンの共有が認められ、刷毛目工具の共有が示唆される事例が存在する（加藤2012・廣瀬2015）。しかし、東淵寺Ａ類やＤ類のように主体的な製作活動を行っている工人が同一製作プロジェクトにおいて刷毛目

工具を共有していたとはやや考えにくい。

また、ａ類、ｄ類ともに工具原体の片側のパターンのみが頻出し、反対側のパターン出現は限定される。Ｄ類は工具の右端が判明しており、右側の中～中細の木目パターンが中心的に現れ、左側に位置する極細帯はほとんど出現しない。一方のａ類は極細パターン付近が頻繁に現れ、ｄ類の右端に相当する中～細の木目配列は殆ど出現しない（図版１）。

一般に刷毛目工具を下から上へ動かす場合、工具を持った手を手前側に巻き込む動作から、右利きの工人の場合は工具の右側が常に器面に当たり、その部分の出現頻度が高くなる（城倉2009）。東淵寺Ａ類及びＤ類は両者ともタテハケの向きやＲ形状から右利き工人と判断される。刷毛目工具が共有された場合、同じ工具を使用しているにもかかわらず、工人によって刷毛目正逆の出現頻度にこれだけ極端な片寄りがあるのはやはり不自然であると言わざるを得ない。ａ類・ｄ類とも原体幅が復元できていないため断言はできないが、両者は母材を同じくした兄弟工具で、何らかの事情でそれぞれの工具で主体的に使用される使用面（端部）が制約されていたと考えた方が妥当ではなかろうか。特にａ類においては現状ではｄ類の右側に相当する木目配列が殆ど確認できない点もこの考えを傍証する。

いずれにせよ、両者が同一工具であろうと兄弟工具であろうと、東淵寺Ａ類とＤ類が極めて緊密な関係にあった工人の手による製品であったことは疑いない。

（５）小　結

以上、東淵寺古墳出土の埴輪について検討を加え、刷毛目パターンからａ～ｉ類の９類に分類し、うち７類（ｃ類は２種に細分）については他の属性との相関から同工品類型として定立しうるものと考えた。ごく限られたトレンチ調査のため、今回の分析を過大評価することはできないが、当古墳の埴輪の場合、７名以上の工人がその製作に関与していた可能性が高いと考えられる。

各類型の点数としては、Ｄ類が８点、Ａ類が６点と主流（56％）を占めている。無論これらは同一個体資料を含んでいるためそのまま受け止めることはできないが、他の類型との相対的比較から言えば、ＡとＤ類という刷毛目兄弟工具を共有する二人の工人の製品が、当古墳の埴輪の主体をなしていたと言っても大きな誤りはないと思われる。

当古墳の埴輪については、後述する上塩冶築山古墳出土の埴輪と同様に、規格や突帯貼付技法などに意宇中枢部では一般的ではない要素が存在する（田中2012・池淵2016b）。しかし、突帯がＭ字状に高く突出し、基底部再調整に円柱状工具によるタタキを有するなどの特徴は、これまで論じられてきた出雲の古墳時代後期埴輪の典型とも言える資料である。また、後述する上塩冶築山古墳の埴輪と比較した場合、各類型間のバラツキが少なく、型式学的距離が比較的近い点も注視しておきたい。

４．上塩冶築山古墳出土埴輪の検討

（１）古墳の概要と対象資料

出雲市上塩冶町に所在する上塩冶築山古墳（以下、築山古墳と略す）は出雲西部を代表する後期古墳としてよく知られており、巨大な横穴式石室から出土した優秀な副葬品を中心に既に詳細な報告が行われている（島根県古代文化センター1999）。平成12・13年度には出雲市教育委員会によって範囲確認調査が行われ、各トレンチから埴輪や子持壺がまとまって出土している（出雲市教育委員会2004）。

今回分析対象とした資料は、過去に出雲市教育委員会が確認調査（出雲市教育委員会1986）を実施した際の埴輪を再報告したもの（島根県古代文化センター1999）と出雲市教育委員会による2004年報告の掲載資料である。分類・分析の手法は東淵寺古墳の場合と同様で、既報告の総ての破片資料のうち、刷毛目パターンが判明するものを対象とした。

（２）上塩冶築山古墳出土埴輪に関する過去の研究

築山古墳出土の埴輪については、既に過去に幾つかの言及がなされている。藤永照隆は当古墳出土の埴輪の特徴を列挙した上、当古墳の埴輪には赤褐色系と黄橙色系の２種類が存在し、色調の相違は形態差とも相関していると指摘した（藤永1999）

その後、範囲確認調査時の埴輪の報告を担当した高橋智也は藤永の視点を継承し、当古墳の埴輪を赤色系、明黄褐色系、暗褐色・黄褐色・淡褐色系の三つに大別し、口縁部や突帯、外面調整との相関を検討した。その結果、色調別のグループは工人集団を反映していると理解し、赤色系の規格性の高い埴輪を製作した少数派の工人と、他の色調の在地の土器製作者によって生産が行われたものと推定した。さらに赤色系の埴輪が出雲東部からの搬入品である可能性も示唆している。このように、高橋の研究は当古墳の埴輪の多様性に対して、系譜を異にする複数の工人集団の関与という具体的な解釈を試みたもので、今後検証していくべき重要な提言であると言える（高橋2004）。また、近年では花谷浩が当古墳埴輪について、規格により大別し、さらに外面調整の手法により細別を試みている（花谷2015）。

以上のように、過去の研究においては当古墳埴輪の多様性が注目され、そこに複数の工人（集団）の存在を想定し、それぞれの視点から具体的な分類が行われている。高橋の主張するとおり色調別の技術的傾向は確実に存在し、当時の工人にとって埴輪を特定の色調に焼き上げようとする意図があったことは、赤彩された埴輪が存在することからみてもまず間違いない。しかし埴輪の色調は窯内における焼成の偶発性に大きく左右されるものであり、必ずしも製作者の意図通りに発色しない場合があることは、同一個体でありながら部分的に色調や焼き上がりの異なる個体が存在することからも明らかである。高橋の構想は基本的には正しいと考えるが、より蓋然性の高い分類の為には、偶然性に左右されない色調以外の有効な属性を一義的に用いて行うのが適切であろう。

その意味で、本稿で行っている刷毛目分類を主軸とした分類及び分析は、上記の課題を解決するのに一定の有効性を持つものと考える。以下、当古墳の埴輪についても東淵寺古墳の場合と同様な手順で分析を進めていきたい。

（3）上塩冶築山古墳埴輪の刷毛目の分類（図版2・3）

当古墳の刷毛目類型については、都合14類に細別した。後述するとおり東淵寺古墳と同じ刷毛目パターンが存在するため、同種の類型は同じ小文字アルファベットで表記し、その続き番号を振っている。東淵寺古墳出土埴輪と共通する刷毛目類型については既に述べたので省略し、ここでは当古墳のみで確認された刷毛目類型の概要を記す。

刷毛目ｊ類（古22-1、22-2、35-9）[9]

1985年の出雲市調査区で2点、T5で1点出土している。条線の密度が8～11本／2㎝の比較的粗いハケで、原体幅3.5㎝程を復元した。条線は極太～中細によって構成され、右側に極太から太、左側に中太～中細がランダムに配列している。全体の印象はｃ類に近いが一致しない。

刷毛目k1類（27-9、10、12、28-16、29-24、29-36、32-2、古22-5）

ｋ類は築山では全部で20点と最も多く出土している。k1類とk2類は全く同じ木目配列だが、全体のパターン幅が若干異なるため別類型として扱う。

密度は15本～22本／2㎝で約4㎝幅を復元した。木目配列は中太～極細により構成され、右側に中太～中のパターン、その左に極細帯が6㎜前後、その左には部分的に極細を交える中～中細帯が2㎝幅で配列されている。凹凸の明瞭な鋭い原体で、極細と中太が混在する独特の木目配列であることから、他の類型とは比較的容易に識別が可能である。

刷毛目k2類（34-7・8、38-5・6・10・15、39-17・18、40-29、42-8、42-10）

密度は13本～21本／2㎝で、約4.8㎝幅を復元した。条線は中太～極細により構成され、木目配列はk1類と同じである。k1類と同様に極細と太が混在する独特の木目パターンで、他の刷毛目原体とは比較的容易に識別できる。先述のとおりk1類とは木目配列パターンは完全に一致するが、全体のパターン幅が異なり、k2類＝k1類×109％の関係にある（図版3右下）。おそらく同一母材から作出された兄弟工具か、同一原体の異なる端面（対偶端面）が使

用されたものと考えられる。

刷毛目k3類（27-14）

約2.2㎝幅を復元できた。条線密度は13本～25本／２㎝で、右に中～細による９条以上の中～細帯があり、その左に１㎝以上の極細～細帯が存在する。刷毛目は非常にシャープで断面はレ字状の追柾目状のものである。全体的な印象はk1・k2類とよく似ているが、配列パターンは全く一致しない。

刷毛目１類（34-2、35-10、35-13）

条線密度は９～10本／２㎝の粗い原体で、中太～極太により構成される。約2.8㎝幅しか復元できず、他の原体の一部を誤認している可能性もある。

刷毛目ｍ類（37-2、43-22）

約3.3㎝幅を復元した。断面蒲鉾形で隆起が高い。条線密度は12～17本／２㎝で、細～極太により構成され、原体左側の極太２条のセットが特徴である。

刷毛目ｎ類（24-1・2、34-6・古22-7）

約4.9㎝幅を復元した。条線密度は15本～17本／２㎝で、中太～細により構成される。右側の中太３条セットが特徴をなす。

刷毛目ｏ類（34-5）

原体幅2.1㎝程度しか復元できておらず、他の類型の一部である可能性もある。密度は13本～14本／２㎝で、太～極細により構成され、右から左に向けて漸次的に太から極細へと変化する。

１類～ｏ類は資料に恵まれず独自の類型として定立するには問題を残すが、他の属性との関係からここに示した。

（４）各刷毛目類型の検討（表２・３、第３・４図）

次に、東淵寺古墳の場合と同様に、各刷毛目類型ごとに各属性との相関関係を検討する。

築山Ａ類（20-2、38-3、38-14、39-24）

20-2を標識する。規格は２条３段で、２段目と口縁部が同じ長さに割り付けられ、底部がやや長い。赤色系で胎土に白色塊を含む。口縁部はＡ類で突帯はいずれも下向きのＭ下２類である。外面調整はＢ種的ヨコハケで口縁部内面は38-3以外は基本的にヨコハケで仕上げる。当類型の最大の特徴は突帯上端に突帯間隔設定技法の凹線が認められる点で、同工品を探る際の重要な手掛かりとなる。

以上、完形品は20-2のみであるが、その他の資料も基本的には20-2と同様の特徴を備えており、同工品類型と認定してよいと思われる。

築山Ｂ類（20-1、24-9、27-13、29-28、32-9）

20-1を標式とする。規格は３条４段で２段目と３段目は間隔が異なる。赤色系で胎土に白色塊を含む。口縁部はＡ類で、突帯はいずれも断面Ｍ字状で下向きをなす。外面調整にＢ種的ヨコハケを施し、口縁部内面はヨコ・ナナメハケで仕上げる。スカシは正円である。突帯間隔設定技法は確認できない。

以上のように各資料とも共通する特徴を備え、同工品類型と見なしてよい。

築山Ｃ類（34-3、古22-3、4）

３点確認できるが、いずれも破片で規格は不明。赤色系で口縁部はＢ類、突帯は上向きのＭ上２類で丁寧な貼付を行っている。外面には二次調整が無く、内面はヨコハケで仕上げる。資料に乏しく不安定であるが、現状では各属性とも矛盾がないことから一類型として扱っておく。

築山Ｄ類（26-2、28-19、32-5、34-1）

34-1を標式とする。３条４段で色調は赤色系で白色塊を比較的多く含む。口縁部は外面に凹面を持つＡ類と段を形成するＣ類がある。突帯はいずれも断面Ｍ字で大振りかつ丸みを帯びた下向きのＭ下3類である。外面調整はＢ種的ヨコハケで、口縁部内面はヨコハケ又はヨコハケ後に凹線をめぐらすタイプである。

口縁部はＡ類とＣ類が混在するが、突帯や外面調整及び口縁部内面調整はほぼ共通することから同工品と見なしてよい。

築山Ｅ類（42-7、44-23、24、25、26）

いずれも大型品で３条４段規格と思われる。底部が残存している資料はいずれも底部が太いという共通した特徴を持つ。色調は橙色・明黄褐色だが外面にはいずれも黒色物が付着している。突帯は断面Ｍ字や台形、上向き及び下向きが混在するものの、突出度が低くて細い点では共通する。外面に二次調整はなく、スカシには小形のものが含まれる。底部は

表２　上塩冶築山古墳出土埴輪　属性表（１）

類型	個体番号	規格	口縁	突帯	突帯貼付技法	刷毛目工具	色調	胎土	基底部再調整	スカシ	外面調整	口縁部内面調整	備　考
A	20-2	２条	A	M下2	突帯上割付凹線	a	5YR6/6橙	少	タタキ1段右	正円	Bヨコ	横ハケ（凹線）	赤色系　技法は東淵寺B類に酷似
A	38-3	－	A	－	－	a	5YR6/8橙	多	－	－	－	ナデ	明橙色系
A	38-14	－	－	M下2	丁寧	a	5YR5/6明赤褐	微	－	－	Bヨコ	横ハケ	赤色系
A	39-24	－	－	M下2	－	a	5YR5/6明赤褐	微	－	－	Bヨコ	斜ハケ	赤色系
B	20-1	３条	A	M下2	丁寧	b	5YR5/6明赤褐	多	タタキ1段左	横長	Bヨコ	横ハケ	赤色系 口縁部長13.4cm
B	24-9	－	－	M下2	丁寧	b	5YR6/6橙	少	－	－	Bヨコ	－	明橙色系
B	27-13	－	－	M下2	やや雑	b	7.5YR6/6橙	なし	－	横長	Bヨコ	斜ハケ	
B	29-28	－	－	M下3	丁寧	b	5YR5/6明赤褐	やや多	－	－	Bヨコ	－	赤色系
B	32-9	－	－	M下2	丁寧	b	5YR5/6明赤褐	少	－	－	Bヨコ	横ハケ？	赤色系
C	34-3	－	B	－	－	c	5YR5/6明赤褐	微	－	－	－	横ハケ	赤色系
C	古22-3	－	－	M上2	丁寧	c	5YR4/6赤褐	微	－	－	一次ハケ	横ハケ	
C	古22-4	－	－	M上2	丁寧	c	5YR4/6赤褐	微	－	－	一次ハケ	斜ハケ	
D	26-2	－	C	－	－	d	5YR6/6橙	少	－	－	－	凹線	
D	28-19	－	－	M下3	丁寧	d	5YR5/6明赤褐	多	－	－	Bヨコ	－	赤色系
D	32-5	－	A	－	－	d	2.5YR5/6明赤褐	多	－	－	－	横ハケ	赤色系
D	34-1	３条	A	M下3	丁寧	d	5YR5/8明赤褐	少	－	横長	Bヨコ	凹線	赤色系 東淵寺D類と同工品
E	42-7	３条	－	M下1	丁寧	e	5YR4/6赤褐	なし	－	縦長小形	一次ハケ	ナデ	外面黒色物付着
E	44-23	（３条）	－	M上2	丁寧	e	10YR6/6明黄褐	微	タタキ2段左　粗	横長	一次ハケ	－	外面黒色物付着
E	44-24	（３条）	－	M下1	丁寧	e	5YR5/6黒色・明赤褐	微	タタキ2段左　粗	横長	一次ハケ	－	外面黒色物付着
E	44-25	３条	－	台2 M上3	丁寧	e	5YR5/6黒色・淡橙色	なし	タタキ1段左　粗	歪円小形	一次ハケ	－	外面黒色物付着 内面２段目まで当具痕
E	44-26	（３条）	－	M下1	やや雑	e	5YR4/6赤褐・黒色	なし	タタキ1段左　粗	－	一次ハケ	－	基底部は外傾接合 タタキではなくナデ？
G	26-1	２条	A	M上2	やや雑	g	5YR5/8明赤褐	微	タタキ2段左	円	断続ハケ	斜ハケ	赤色系
G	32-1	２条	－	M上1a	丁寧	g	10YR6/4にぶい黄橙	微	タタキ2段左	横長？	断続ハケ	－	明橙色系
J	26-5	－	A	－	－		5YR6/6橙	少	－	－	－	凹線	
J	35-9	－	－	M上2	やや雑	j	5YR5/6明赤褐	微	－	－	断続ハケ	斜ハケ	
J	古22-1	－	B	M上2	丁寧	j	5YR4/6赤褐	微	－	横長	断続ハケ	横ハケ	
J	古22-2	－	B	－	－	j	5YR4/6赤褐	微	－	－	－	横ハケ	22-1と同一個体
K1	27-9	３条	－	M上4	粗	k1	2.5YR5/6明赤褐	微	タタキ2段左	－	断続ハケ（一次？）	－	基底部ハケ痕有
K1	27-10	－	－	M上4	粗	k1	2.5YR5/6明赤褐	微	－	－	断続ハケ	－	27-9と同一個体
K1	27-12	－	－	M上4	やや粗	k1	5YR5/6明赤褐	微	－	－	断続ハケ	横ハケ	
K1	28-16	－	－	M上4	やや粗	k1	5YR5/6明赤褐	なし	－	横長	断続ハケ	横ハケ	
K1	29-24	－	－	M上4	やや粗	k1	5YR5/6明赤褐	少	－	－	断続ハケ	ハケ？	
K1	29-36	－	－	－	－	k1	5YR6/6橙	微	倒立ハケ	－	－	－	倒立タタキ調整後内外面ハケ
K1	32-2	3条	－	M上2	丁寧	k1	5YR5/3にぶい赤褐	少	－	正円	断続ハケ	ナデ	還元色
K1	古22-5	3条	－	M上4	やや粗	k1	10YR7/6明黄褐	なし	－	正円？小型	断続ハケ	－	貼付沈線
K2	34-7	－	－	M上2	丁寧	k2	5YR5/3にぶい赤褐	少	－	－	断続ハケ	横ハケ	還元色
K2	34-8	－	－	M上2	丁寧	k2	5YR5/4にぶい赤褐	少	－	縦長？	断続ハケ	－	34-7と同一個体か 還元色
K2	38-5	－	A	－	－	k2	5YR5/6明赤褐	なし	－	－	－	横ハケ	
K2	38-6	－	A	－	－	k2	5YR5/6明赤褐	なし	－	－	－	横ハケ	38-5と同一個体か
K2	38-10	－	A	－	－	k2	5YR5/6明赤褐	なし	－	－	－	横ハケ	38-8と同一個体か

表３　上塩冶築山古墳出土埴輪　属性表（２）

類型	個体番号	規格	口縁	突帯	突帯貼付技法	刷毛目工具	色調	胎土	基底部再調整	スカシ	外面調整	口縁部内面調整	備　考
K2	38-15	－	－	M上4	粗	k2	5YR5/6 明赤褐	なし	－	正円	断続ハケ	横ハケ	スカシ面疵
K2	39-17	－	－	M上1a	やや粗	k2	5YR5/6 明赤褐色	微	－	－	断続ハケ	－	
K2	39-18	－	－	M上4	やや粗	k2	5YR6/6 橙	微	－	正円	断続ハケ	ナデ	スカシ面疵
K2	40-29	－	－	M上2	粗いナデ	k2	5YR5/6 明赤褐	なし	タタキ２段 左　ハケ痕	横長	断続ハケ	－	
K2	42-8	－	A	－	－	k2	7.5YR6/6 橙	なし	－	－	－	横ハケ	
K2	42-10	－	－	台3	丁寧	k2	5YR5/6 明赤褐	微	－	－	一次ハケ	－	
K3	27-14	－	－	M上1b	丁寧	k3	5YR5/6 明赤褐	微	－	正円 小形	断続ハケ	斜ハケ	
L	34-2	－	A	丸	やや粗	l	5YR5/8 明赤褐	少	－	－	一次ハケ	板ナデ	
L	35-10	－	－	M下4	やや粗	l	7.5YR6/6 橙	少	－	－	断続 板ナデ	ヨコハケ	明橙色系
L	35-13	２条	－	丸	やや粗	l	5YR5/6 明赤褐	微	タタキ２段 左　ナデ？	－	－	－	
M1	28-21	２条	－	台1	丁寧	（m）	7.5YR6/6 橙	多	タタキ１段 左	横長	一次ハケ	－	
M1	37-2	２条？	－	台4	丁寧	m	10YR6/6 明黄褐	多	タタキ２段 左（板？）	正円	一次ハケ	－	
M2	43-22	－	－	－	－	m	5YR5/6 明赤褐	なし	倒立ハケ	－	－	－	赤色系
N	24-1	－	D	－	－	n	7.5YR5/6 明褐	少	－	－	－	横ハケ	
N	24-2	－	D	－	－	n	5YR5/4 やや還元	なし	－	－	－		
N	34-6	３条？	－	丸	丁寧	（n）	7.5YR6/6 橙	少	－	正円 小形	１次ハケ	ナデ	
N	古22-7	３条	－	台4	丁寧	n	7.5YR6/4 にぶい橙	なし	タタキ１段 左　倒立ハケ	横長 小形	２段ハケ ３段ナデ	斜ハケ	
0	34-5	３条	－	台2・M上3	丁寧	0	5YR5/6 明赤褐	なし	－	縦長 小形	断続ハケ	－	
P	37-1	３条	A	M上2	丁寧	－	5YR5/3 にぶい赤褐	微	タタキ２段 左	横長	板ナデ	板ナデ	還元色

第１突帯付近の器壁が非常に厚くタタキ調整が十分行われていないのが特徴で、それが他の類型に比べて基底部が太いという形態にも反映されている(10)。

このように、当類型は他の類型には見られない特徴を複数共有する点から同工品と考えられる。

築山Ｇ類（26-1、32-1）

26-1を標式とする。規格は２条３段、色調は明赤褐色から黄橙色系でややバラツキがある。口縁部はＡ類で、突帯は細身のＭ上1a類及び通常幅のＭ上２類だが、突出度が高い点で共通する。外面調整は２次調整に弧状の断続ナナメハケを施すのが特徴である。口縁部内面はナナメハケを施す。底部は定型的な円柱タタキ調整だが、いずれも一次調整のハケが残存している点で共通する。

Ｇ類は２点であるが各属性ともよく似ており、同工品と判断される。

築山Ｊ類（26-5、35-9、古22-1•2）

色調は赤色系で、口縁部はＡ類とＢ類の両者が存在する。突帯はＭ上２類で突出度が高い。外面は断続的ヨコハケ、口縁部内面はヨコハケで仕上げる。口縁部に異同があるが、他は概ね斉一的であることから一類型として理解しておく。

築山Ｋ類

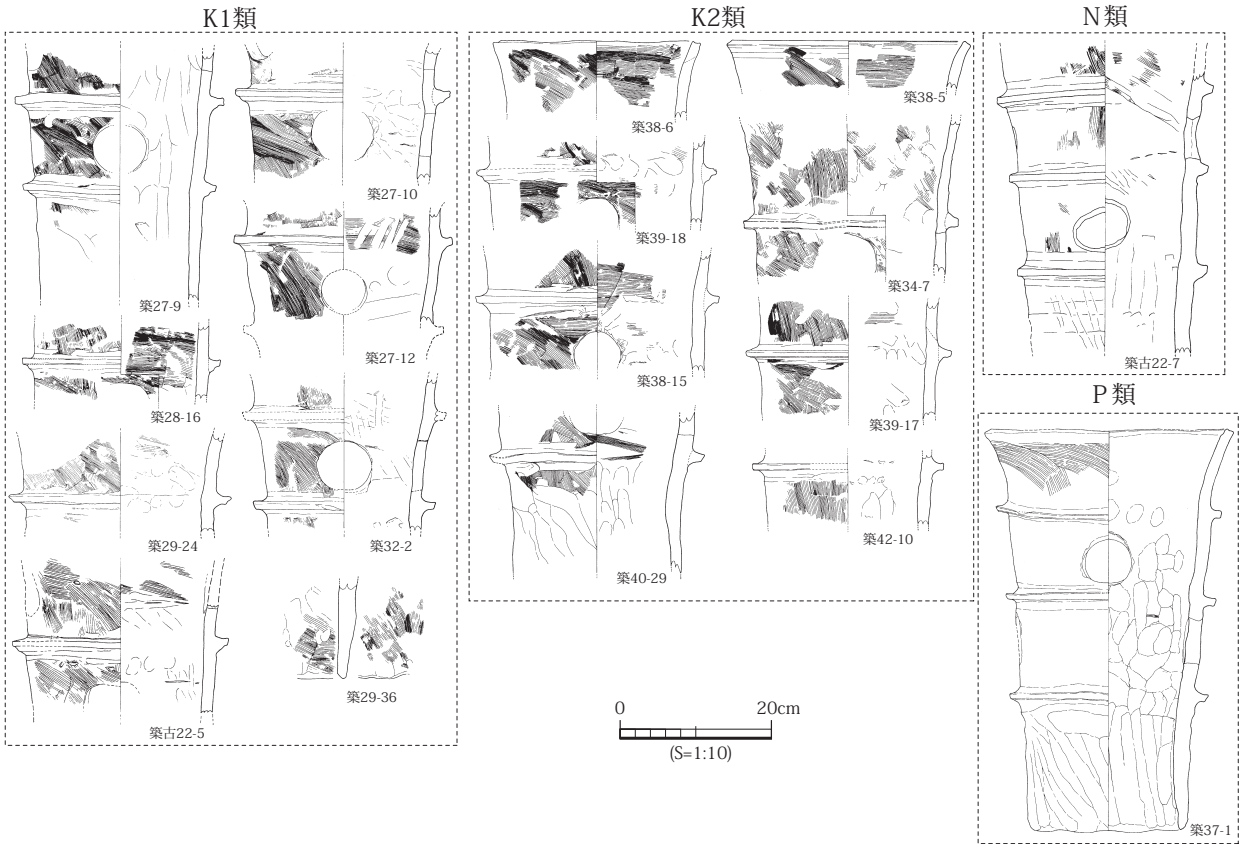
Ｋ類は全部で20点確認でき、当古墳では最も多くを占める類型である。規格の判明するものはいずれも３条４段で、色調は赤色又は褐色だが還元色を呈する資料を一定量含むのが特徴である。口縁部は確認できるものはいずれもＡ類である。突帯はＭ上２類、Ｍ上４類、Ｍ上1a類、Ｍ上1b類、台３類が混在するが、中心をなすのは突帯下半がヨコナデによって段を形成するＭ上４類で、他の類型と比較すると際立っている。また、当類型の断面Ｍ字としたものは端部があまり突出せず台形に近い。スカシは正円を呈するものが多い。

外面調整は27-9・42-10を除くといずれも断続ハケで統一される。なお、Ｋ類の外面断続ハケの中に

は下の突帯貼付時のヨコナデを切り、上の突帯貼付のヨコナデに切られる資料が散見される（32-2など）。これは山代二子塚古墳の報告で丹羽野裕が指摘したように、各段ごとに粘土紐が積み上げ・成形された可能性を示唆する（丹羽野1992）。

口縁部内面調整は判明するものはほぼヨコハケで統一される。底部調整は通有の円柱タタキのものと倒立ハケのものが混在し、後者にはG類と同様に一

第３図　上塩冶築山古墳出土埴輪の類型（１）



第４図　上塩冶築山古墳出土埴輪の類型（２）

次ハケ痕を残す。

以上のように、当類型は刷毛目では３つに細分されるが、各類型とも突帯や外面調整、口縁部内面調整などの諸属性は非常によく似ている。刷毛目以外ではあえて細分する要素は無いが、ここでは一応３類型に分けて考えておきたい。なお、k1類の基有部再調整には通常の円柱タタキの他、倒立ハケ調整が認められる点が注意される。

築山Ｌ類（34-2、35-10、35-13）

３点が該当する。色調は明赤褐色又は橙色で口縁部はＡ類。突帯は丸類とＭ下４類でばらつきがある。外面調整は部分的に板ナデを使用する資料がある。小片で資料数も少ないことから、類型設定は保留する。

築山Ｍ類（28-21、37-2、43-22）

３点存在するが各資料ごとのばらつきが著しい。色調は橙色・黄褐色系（28-21、37-2）と赤褐色系（43-22）に二分される。前者は断面台形の突帯で外面二次調整を欠き、基底部は円柱状工具によりタタキ調整を行う。一方の赤褐色系は基底部のみしか残っていないが、円柱タタキではなく倒立ハケ調整を施している。

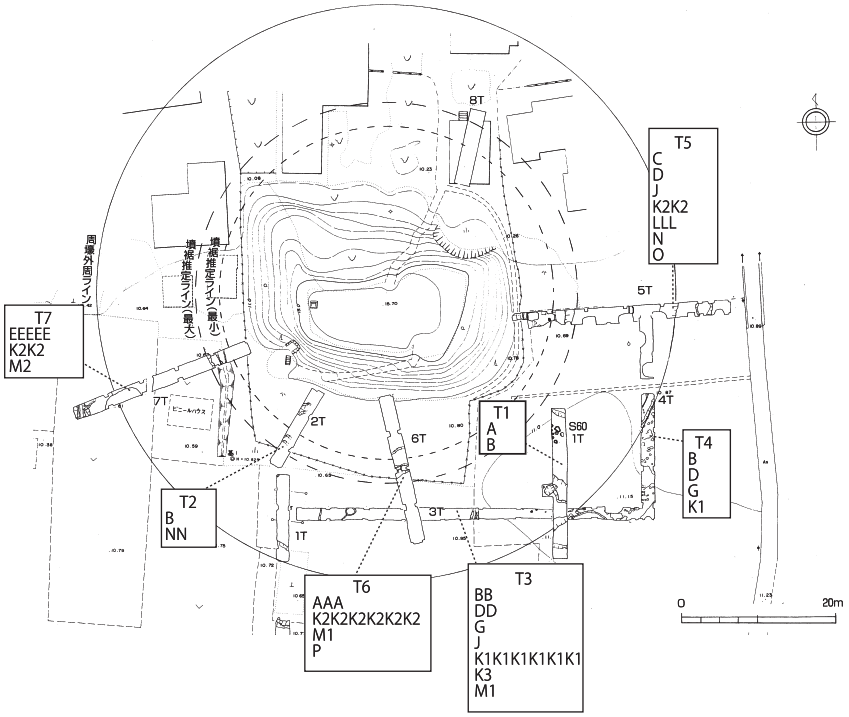
色調の違いも勘案すると、この底部調整の違いが個人内の属性変異に収まるとは考え難く、Ｍ類についてはＭ１類とＭ２類とに細分しておく。

築山Ｎ類（24-1・2、34-6、古22-7）

色調や突帯、スカシ形状、外面調整のいずれの属性もばらつきがあり、有意なまとまりは見出し難い。刷毛目類型としても不安定な部分があり、類型設定は保留する。

築山Ｏ類（34-5）

34-5の１点のみである。３条４段の大型品で明褐色を呈する。突帯は突出度の比較的低い台２類またはＭ上３類で小形で縦長のスカシを穿つ。外面調整は断続ヨコハケだが、各段上半部しか施されないのが特徴である。１例のみではあるが、同様な特徴を備える資料は他の類型にはみられないことから、独自類型として設定しておく。



第５図　上塩冶築山古墳出土埴輪各類型の出土状況

築山Ｐ類（37-1）

37-1の一例のみである。３条４段で還元焼成の色調を呈する。口縁部Ａ類、突帯Ｍ上２類、基底部円柱タタキと他の類型と通底する属性も多いが、内外面ともに板ナデ状の浅い擦痕で仕上げるという他の類型にはない特徴を備える。

（５）各類型の出土状況（第５図）

第５図にトレンチごとの各類型の出土点数を示した。トレンチ単位の出土傾向という非常に大雑把なものであるが、ある程度の出土傾向は掴むことはできる。

一見するとK1類やK2類は特定のトレンチから集中して出土しているようにも見えるが、これらの多くは同一個体であった可能性が高い。それを勘案すると資料が乏しいため明確なことは言えないが、基本的には各類型とも比較的分散して出土しており、特定箇所から特定類型が集中して出土する傾向は稀薄である。

しかし、その中でＥ類のみが７トレンチから５点出土している点は注目に値する。これらは遺存状況からみて別個体と考えられ、また他のトレンチでの出土は確認できない。

Ｅ類は３条４段の大型品で表面が黒色を呈する特異な製品であり、７トレンチが石室開口部付近であることも考慮すれば、その集中的配置に何らかの意味があった可能性も考慮される。この類型が黒色を呈する点が後世の二次的な成因によるものか、意図的なものかも含め、今後の検討が求められよう。

（６）小　結

以上、刷毛目類型をもとに当古墳の分類を試みた。刷毛目は14種に細別したが、ｍ類については複数工人が関与していた可能性が高く、さらにk1類についても、基底部調整のあり方から複数工人が存在していた可能性が考えられる。ごく限られたトレンチ調査での所見ではあるが、少なくとも十数名の工人が当古墳の埴輪製作に関与していた可能性が高いと推察される。当古墳が出雲西部を代表する後期古墳であることを勘案すれば、先程の工人数はそれ程突飛な数字ではないように思われる[11]。

刷毛目類型を中心とした今回の分類結果を過去の研究と照らし合わせてみると、個別資料の位置づけは若干異なっているものの、大筋においてはほぼ同

じ結果が得られた。藤永や高橋が想定したような色調に基づく大別は、今回の刷毛目類型と大筋では一致しており、色調が工人（集団）の意図的なものであったことを端的に物語っている。花谷による埴輪規格及び外面二次調整の分類とも、今回の刷毛目分析結果は概ね整合的であり、特に外面二次調整は刷毛目類型と高い相関にある。このように、今回の分析結果は過去の研究の妥当性を大筋で追認できたものと考える。

先にふれたとおり、埴輪の色調は窯内の偶発性に左右される場合も多く、同一個体でありながら一部は還元色で一部は酸化色を呈する個体もしばしば見受けられる。属性表に示したズレ[12]はこのような窯内の偶発性を反映したものであろう。しかし、高橋が赤色系とした一群は発色に関しては比較的安定していて還元色のものは存在しないことから、工人の意図通りの発色が達成されていると思われる[13]

5．両古墳出土埴輪の比較検討

（1）両古墳の刷毛目パターンの比較（図版4）

以上、東淵寺・築山両古墳出土の埴輪について検討を加えてみた。冒頭で述べたとおり、両古墳の埴輪は複数の刷毛目パターンを共有する。今回の検討で判明した両古墳で共有される刷毛目パターンは、可能性のあるものを含め、a、b、c、d、e、gの6類型である（図版4下）。このうち、a、b、d類は、木目パターンの細部まで一致し、原体の異同はさておき同じ刷毛目パターンであることはまず間違いない。c類は全体では若干ズレが生じているが3.3㎝幅で一致し、同一刷毛目パターンと思われる。g類は約5％程のズレが認められるが、木目パターンはほぼ完全に一致する。同一工具で焼成時の収縮で生じた誤差なのか、兄弟工具や使用端面の違いによるズレなのかは判じ難いが、いずれにせよ両者が極めて緊密な関係にあることは疑いない。

e類は一致幅が狭く、他の類型のように同じ刷毛目パターンであると言い切るにはやや躊躇を覚えるが、ここではその可能性が高いものとして、以下の議論を進めたい。

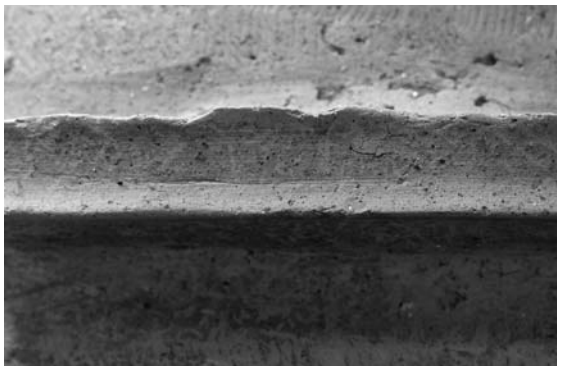


写真1　東淵寺A類の突帯調整（66-10）

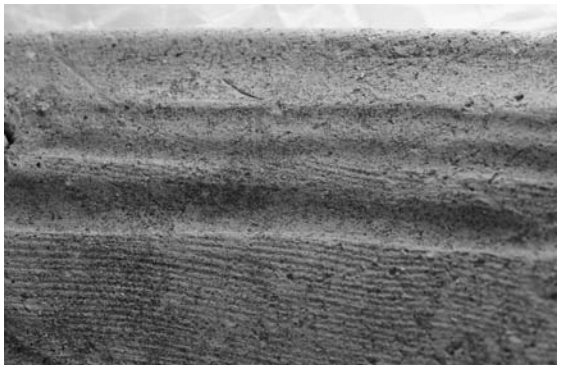


写真2　東淵寺D類の口縁部内面調整（55-4）

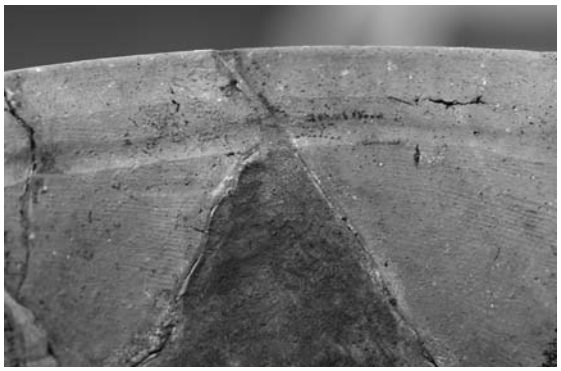


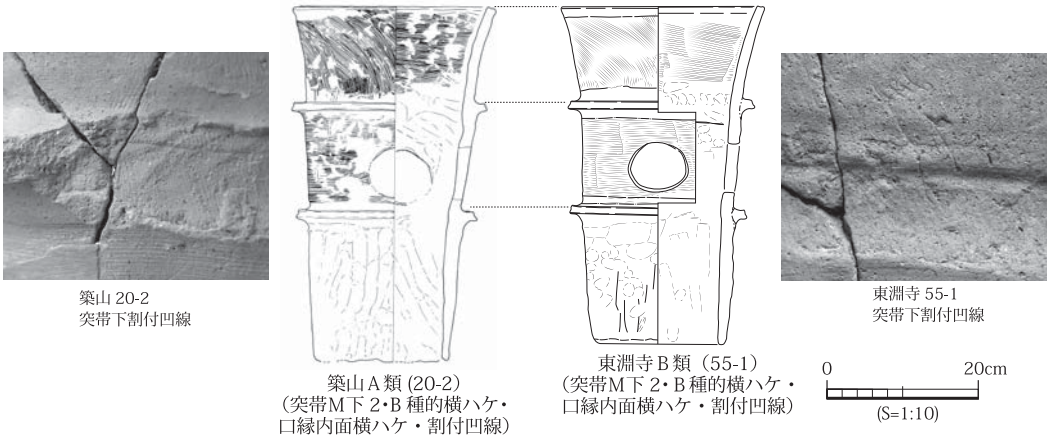
写真3　築山D類の口縁部内面調整（34-1）

（2）共有刷毛目パターン類型の比較検討

次に、両古墳で共有される刷毛目パターンを持つ類型が、同一工人の手による同工品であるかどうか、個別に検討を試みる。

刷毛目a類

まず刷毛目a類であるが、当刷毛目類型の東淵寺A類と築山A類とは、同じ3条4段の規格でありながら、口縁部、突帯、内外面調整はいずれも一致せず同工品とは考え難い（第7図）。特に東淵寺A類のM上1b類の突帯は非常にシャープなつくりで、突帯端部が鋭く突出する。これはおそらく親指と人差し指で突帯の上下端を2回に分けて撫でた結果に



第 6 図　東淵寺Ｂ類と築山Ａ類との比較

よるものと思われ、突帯正面には突帯下面のヨコナデの際の親指爪のアタリが観察される（写真１）。突帯下の沈線もこのヨコナデの際の人差し指爪のアタリである可能性がある。同様な特徴を備える突帯は現状では築山資料の中には確認できない。

刷毛目ｂ類

次に刷毛目ｂ類についてみてみる。刷毛目ｂ類を持つ東淵寺Ｂ類と築山Ｂ類は規格こそ異なるものの、口縁部、突帯、内外面調整はほぼ一致しており、同工品としての要件を備えているように思われる。しかし、東淵寺Ｂ類で認められた突帯貼付前の割付凹線は築山Ｂ類では確認できない[14]。

この点で注目されるのは、東淵寺Ｂ類と築山Ａ類との類似性である（第 6 図）。前者は刷毛目ｂ類、後者はａ類と異なるが、同じ 2 条 3 段で口縁部や突帯形態、内外面調整が一致するほか、両者とも割付凹線を有する。さらに両者の法量を比較してみた場合、基底部長はやや異なるが、2 段目間隔と口縁部長はほぼ一致しており、別古墳の製品としては極めて異例である。つまり両者は同じ割付工具（方法）によって同一規格を意図して製作された同工品である可能性が高い[15]。

この場合、論理的には築山Ａ・Ｂ類の両者とも同一工人の手による製品との考え方もある。しかし、同一古墳の埴輪生産プロジェクトにおいて、同じ工人が異なる刷毛目工具で異なる類型の製作を行っていたと想定するのはかなり不自然である。むしろ、築山ではａ類工具を使用して築山Ａ類を製作していた工人が、東淵寺古墳では工具をｂ類に持ち替えて東淵寺Ｂ類を製作し、築山Ｂ類は別工人の製品と考えた方が整合的であるように思われる。

刷毛目ｃ類

刷毛目ｃ類を用いている東淵寺Ｃ類と築山Ｃ類とは資料不足のため不確定要素が大きいが、突帯や外面調整が異なっていることから、別工人の製品であった可能性が高い（第 7 図）。

刷毛目ｄ類

刷毛目ｄ類を用いる東淵寺Ｄ類と築山Ｄ類は、両者とも突帯が大ぶりで丸みを帯びたＭ下 3 類であり、外面調整にＢ種的ヨコハケを使用し、口縁部内面をハケ調整後に凹線をめぐらす点で非常によく似ている（第 7 図）。唯一口縁部が異なっているが、口縁部Ｃ類はＡ類外面の凹面を強調したものと理解すれば個人内の属性変異とみてよいだろう。特に口縁部内面の凹線は他の類型ではほとんど存在しない点から（写真２・３）、両者は同工品であると理解したい。

刷毛目ｅ類

刷毛目ｅ類を使用する東淵寺Ｅ類と築山Ｅ類は、規格や突帯、外面調整が全く異なり、同一工人の製品とは考えられない。

刷毛目ｇ類

刷毛目ｇ類を使用する東淵寺Ｇ類と築山Ｇ類は、形象埴輪と円筒埴輪であるため刷毛目以外の属性で

は比較検討ができない。ただ刷毛目パターンを共有するという点から、両者は非常に近しい関係の工人であったと考えられる（第７図）。

（３）工人集団の復元（第７図）

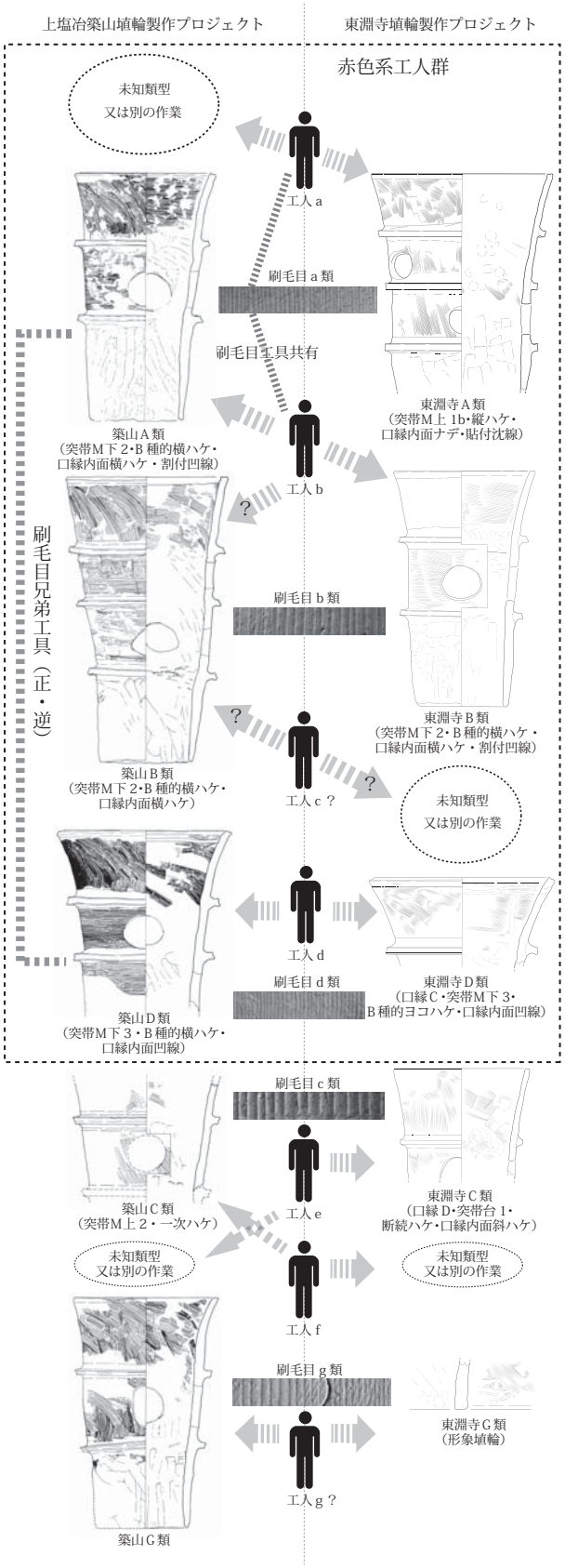
以上、両古墳埴輪の各類型のうち、刷毛目パターンが共有される類型について検討を加えた結果、同一工人が同じ工具を使用して製作する場合（ｄ類）と、異なる工具を使用する場合（ａ～ｃ類、ｅ類）の二者が認められた。

各工人の動きについて整理すると、まず東淵寺Ａ類を製作した工人（工人ａ）は先述のとおり築山では確認できない。このことから、工人ａは築山ではまだ確認できていない未知の類型を製作したのか、又は埴輪成型以外の作業に従事していたか、または築山の埴輪生産プロジェクトには全く参加していなかったかのいずれかであったと想定される。

次に築山古墳で築山Ａ類を製作していた工人（工人ｂ）は、先述のとおり東淵寺古墳ではＢ類を製作している。この点から、刷毛目ａ類は工人ａ・ｂ間で賃借が行われる関係にあったと言える。また、築山Ｂ類を製作した工人は東淵寺Ｂ類を製作した工人（工人ｂ）の可能性も考慮されるが、先述の理由により工人ｂではなく別の工人（工人ｃ）であった可能性が高い。東淵寺古墳で工人ｃが製作したと考えられる類型は現状では確認できず、やはりまだ未知の類型が存在するか、東淵寺では別の作業又はプロジェクト不参加と考えられる。

次に、東淵寺Ｄ類と築山Ｄ類を製作した工人は先述のとおり同一工人（工人ｄ）と考えられる。刷毛目類型の検討で述べたとおり、刷毛目ａ類とｄ類は正逆の関係にある兄弟工具と考えられ、ａ類を使用した工人ａとｄ類を使用した工人ｄは非常に近しい関係にあったと想定される。

このように、刷毛目ａ類、ｂ類、ｄ類を有する工人は埴輪製作プロジェクトごとに刷毛目工具を賃借したり、同一母材から製作されたや兄弟工具を保有するなど、極めて近しい空間的位置関係にあったと言える。その空間位置関係とは、誤解を恐れずに言えば、同一工房に属する工人群であった可能性が極



第７図　赤色系工人群の復元

めて高い。他の属性でも、赤色の色調や下向きの突帯形状、口縁部や突帯の整形において凹面を多用・強調する点、外面にＢ種的ヨコハケを多用するなど多くの共通点を備えている。この工人集団は、先ほどの検討が正しければ、少なくとも３名以上の工人が属していたと考えられる。ここでは、この集団を仮に赤色系工人群と呼称しておく。

一方、その他の刷毛目共有類型、ｃ、ｅ、ｇ類に関しては各類型間を取り結ぶ積極的な共通項を見出すことはできない。ｃ類とｇ類については、これらの工具を使用した工人は、色調や突帯形状から赤色系工人集団との間に何らかの関係があったと思われるが、それを実証する兄弟工具の存在や工具賃借関係は今のところ確認できない。しかし、そもそも両刷毛目類型とも両古墳の埴輪製作プロジェクトに跨がって使用されていることを考えれば、ｃ・ｇ類を使用した工人は赤色系工人群にかなり近い位置にいた工人たちであった可能性が高い。強い赤色指向や高くＭ字状に突出する突帯、外面の断続ヨコハケの存在は両群の型式学的距離が比較的近いことを暗示する。

次に、非共有類型を含めた両古墳の製作状況について述べる。

まず東淵寺古墳では、共有類型以外にｆ、ｈ、ｉ群があるが、断片資料のためこれ以上の言及はできない。ただし、色調や焼成は基本的に他の類型と共通しており、築山のような極端なばらつきが認められない点は重要である。

一方の築山古墳であるが、まず黄褐色系のｍ・ｎ類においては、同じ刷毛目類型の中での個体差が著しく、複数の工人が刷毛目工具を共有していた可能性があり、刷毛目工具の属人性が低い状態であったと考えられる。製作技術の点を見ても、発色や細部の作り込みが赤色系に比べると粗雑な印象があり、あまり埴輪生産に習熟していなかった工人の製品と思われる。こうした点を考慮すれば、黄褐色系（ｍ、ｎ類）の工人は、当古墳の埴輪生産にあたって臨時的に徴発された工人であったと想定される。

次に、築山古墳で最も多く認められる築山Ｋ類については、刷毛目類型と突帯や外面調整などの他の属性との間に高い相関が認められる安定した製品群であり、黄褐色系に比べると埴輪生産に習熟した工人像を想定できる。ただし、刷毛目k1類では基底部再調整に円柱タタキの他に倒立ハケの資料が混在する。他の類型の状況からみて基底部再調整の差異が個人内の属性変異とは考えにくく、やはりk1類は複数の工人によって使用され、同一プロジェクト中に刷毛目工具の賃借が行われていたことになる。となれば赤色系工人群と比較すると刷毛目工具の属人性がやや低い工人群であった可能性がある。

以上のように、築山古墳の埴輪製作体制は、大まかには赤色系工人群（Ａ・Ｂ・Ｄ類）とそれらと比較的近い距離に位置する工人群（Ｇ類・Ｃ類）、主体的な製作を担っていた橙色系工人群（Ｋ群）及び臨時的に徴発された在地系の黄褐色系工人群（ｍ、ｎ類）によって構成されていたと想定できよう。

６．考　　察

（１）赤色系工人群の評価

どこで生産されたのか

これまで述べてきたとおり、両古墳出土埴輪は刷毛目類型を複数共有する点から、少なくとも共有される刷毛目パターンの各類型に関しては、同一工房とも言うべき極めて近しい工人集団によって製作された製品であったと考えられる。では、これらの製品はどこで作られたのであろうか。当該期の埴輪生産が一定の生産拠点において恒常的に生産されていたのか、それとも工人が各地を巡回して生産していたのかで評価は大きく異なるが、６世紀の畿内や列島各地の埴輪生産の様相を勘案すると、後者の可能性はかなり低い（高橋1994）。

築山古墳の円筒埴輪に関しては、口縁部高＝突帯間隔＜底部高という規格、凹線による突帯間隔設定法などの存在から、これまで意宇平野周辺域の円筒埴輪との異質性が強調されてきた（田中2012）。しかし、先述のとおり貼付前凹線は多様な築山古墳の埴輪群のうち現状では１類型にしか確認できないのであって、これをもって築山の埴輪群を代表させる

ことはできない。むしろ築山古墳の埴輪群内における赤色系工人群の製品と在地産と想定される黄褐色系の製品との共存関係を鑑みれば、赤色系製品群に関してはかつて高橋が想定したように、出雲平野以外に生産地を求める方が妥当性があるようにも思われる。製作地の問題に関しては、今後近隣古墳出土埴輪との刷毛目類型をはじめとする詳細な比較検討や胎土分析等を行うことによって自ずと明らかにされるものと思われる(16)。

東淵寺古墳と築山古墳との新古関係

次に、両古墳の埴輪群は時期的にどのような関係にあるだろうか。須恵器からみれば、論者によって微妙な差異はあるが、両古墳とも出雲３期後半～４期前半の範疇内に収まるものと理解されている（大谷1994・坂本2012・岩本2016）。出雲型子持壺は築山資料が非大井産のため直接的な比較は難しいが、当資料は東淵寺古墳資料の所属するⅡ期（古）段階の製品をモデルに製作されたと考えて大過ない（池淵2016b）。このように両古墳は須恵器からは概ね同時期の所産と想定されるが、それ以上の追求は難しい。

埴輪に関しては今回両者で共有される可能性のある刷毛目類型を６パターン確認した。刷毛目原体の場合も、瓦や鏡のように笵傷の進行が確認できれば直接的な新古関係が判明しようが、今回明らかになった共有刷毛目パターンを観察する限り、刷毛目工具の欠損部の進行などは確認できなかった。これは刷毛目の場合は静止圧痕ではなく動的な擦痕である刷毛目工具原体論の限界とも言える（木立2003）。

埴輪の特徴からみた場合、築山古墳ではk1類などで基底部再調整に倒立ハケメを施す資料が認められる点や、還元色を呈する資料が一定量存在する点から、これらの技法・焼成がほとんど認められない東淵寺古墳資料より先行する可能性はある(17)。しかし現段階ではそれを積極的に肯定できるような資料状況にはない。

ただ、直線距離で35㎞以上離れた古墳間において、５ないし６種類の刷毛目パターンが共有されているという事実は重要である。下総型埴輪では多くの古墳間で同工品が共有される事実が明らかにされているが、その多くは１、２類型の共有にとどまり、最も多い事例で５類型である（犬木2007）。刷毛目工具の耐用年数や保有形態、製作から廃棄に至るライフサイクルについては未だ不明な点が多いが、常識的に考えれば刷毛目工具が伝世するとは考えにくい。この点から両古墳の埴輪は、複数の刷毛目工具の耐用年数内でかつ工人のメンバーシップが殆ど変化しないという、極めて近接する期間内に製作されたことは疑いない。

（２）東淵寺古墳・築山古墳と東西出雲論

今回の検討では、両古墳の埴輪が極めて近接する時期に作られ、かつ両古墳の埴輪の一部は同一工房ともいうべき極めて近しい工人群の手によるものである点を指摘した。この事実が当該期における出雲の埴輪生産において如何なる評価が与えられるかについては、当該期の他の古墳間においても同様な現象が認められるのかどうかが明らかにされた段階で改めて評価されるべき事柄であり、ここで性急な結論を引き出すことは差し控えたい。ただ、６世紀末の東西出雲を代表する首長墳が同一工房からの製品供給を受けていたという事実は、単に当該期の埴輪生産・流通の問題だけでは済まされない課題を内包していると考える。

出雲における埴輪生産は、５世紀末頃には10ｍ未満の小規模古墳にまで埴輪が供給されるまでに生産体制が拡大し、６世紀後半の山代二子塚古墳築造の段階に大きな画期を迎える。この時期には当地独特の基底部再調整として円柱状工具によるタタキ技法が新たに登場するとともに、円筒埴輪は２条３段と３条４段タイプに統一され、墳丘規模と円筒埴輪の規格との間に明瞭な対応関係が認められるようになる(18)。すなわち、この段階から円筒埴輪が出雲東部を中心とする地域の首長間における政治秩序を表徴するアイテムとして機能を担うようになるのである。東淵寺古墳と築山古墳の両古墳についても例外ではなく、同一工房の製品であるという事実に基づけば、こうした出雲東部の最高首長を頂点とする階層的政治的秩序を受容した上で製品の供給を受けて

いたものと推察される。

両古墳とも円筒埴輪には２条３段と３条４段の規格が存在し、円筒埴輪の規格自体には階層差は認められない。しかし問題は墳形である。主丘部の規模は東淵寺古墳が径42m前後（島根県教育委員会2016）、築山古墳が約46m（出雲市教育委員会2006）と築山古墳の方がやや大きい。しかし前方部の有無という１点において両古墳は際だった差異を見せている。先述のとおり両古墳が非常に近接した時期の築造であること、同一工房から供給される埴輪に付帯される階層的意味を受容している点を鑑みれば、両古墳の墳形の差は時期差や前方後円墳消滅期の墳形変化に起因するものではなく、当該期の出雲における何らかの政治秩序を表徴している可能性が高い。

古墳時代後期の出雲については、これまで東西出雲論と称されるように、出雲の東西に有力な政治勢力が存在して拮抗する関係にあり、最終的には７世紀のある段階に出雲全域が出雲東部の首長勢力のもとで統合化されるというプロセスが想定されてきた（渡辺1986・大谷1997など）。こうした議論のなかで、築山古墳は巨大かつ精美な横穴式石室や装飾付大刀、金銅装馬具などの優秀な副葬品の存在から、今だ東西出雲の両勢力が拮抗する段階の西の最高首長墳として理解されてきた（大谷1999）。しかし今回の埴輪の検討結果からは、少なくとも埴輪が樹立される段階においては、築山古墳は既に出雲東部の最高首長を頂点とする政治秩序の枠内に組み込まれつつあったとの見方も、今後検討していくべき視点ではなかろうか[19]。

７．おわりに

以上、東淵寺古墳・上塩冶築山古墳出土の埴輪について検討を加え、若干の問題提起を行った。通常の同工品分析とは異なり破片資料が主たる対象という資料的制約から十分な検討はできなかったが、６世紀の東西出雲を代表する遠隔地の首長墳間において共有される複数の刷毛目パターンを抽出し、それを手掛かりに当該期の埴輪生産体制の一端を垣間見ることができたことは一定の成果であったと思う。また、西日本では検討例の乏しかった刷毛目工具の保有形態のあり方、特に異なる埴輪生産プロジェクト間においてどのように刷毛目工具が保有されていたのかという点に関しても、今後検討を進めていく上での貴重な事例を提供できたものと考える。

当然のことながら二つの古墳出土資料の分析だけではわかりうることはごく限られている。しかし、同種の検討を積み重ねることによって、当該期の出雲の埴輪生産の実像により具体的なアプローチが可能となり、本稿で論じた赤色系工人群の製作地の問題も自ずと結論が見えてくるものと思われる。今後の研究の進展を期待したい。

なお、冒頭でふれたとおり、本稿は同僚の田中大氏のご教示が契機となったものであり、その後も埴輪研究には全くの門外漢である筆者に対して当地の埴輪研究の現状について初歩から教えていただいた。この場を借りて改めてお礼申し上げます。

また、再三にわたる資料調査にもかかわらず懇切丁寧な対応をしていただいた出雲弥生の森博物館の坂本豊治氏・安部百合子氏をはじめ、資料調査等においては下記の方々・諸機関にお世話になった。記して謝意を表します。

赤澤秀則、飯塚康行、今井智恵、岩本　崇、岩本真実、平石　充、日野一輝、平郡達哉、廣瀬　覚、松本岩雄、渡邉正巳 、出雲弥生の森博物館、島根県立八雲立つ風土記の丘、島根大学考古学研究室、松江市まちづくり文化財課（五十音順、敬称略）

【註】

（１）今回の分析では、同一トレンチから出土し色調や調整などから同一個体の可能性が高い資料についても、直接的な接合関係が認められないも場合は別個の資料として扱っている。

（２）66-6という番号は、島根県教育委員会2016の第66図6であることを示す。以下、当古墳の資料番号に関しては同様に表記する。

（３）刷毛目の記録については、撮影時にスケールを写し込んでパソコンの画面上で縮尺をそろえる任意撮

影法によって行った（犬木2013）。使用機材はカメラがPENTAX社のK-r及びK-s1、レンズはTAMRON AF90㎜ F/2.8 MACROを使用し、２倍に拡大して印刷したうえ刷毛目の異同を検討した。

（４）井上義也は福岡県貝徳寺古墳と野藤１号墳出土埴輪のうち110％の比率で一致する事例を取り上げ、母材を同じくする兄弟工具であるか、または乾燥・焼成時の条件差によるものと理解している（井上2011）。

（５）条線は、一つの刷毛目パターンにおいて、極太、太、中太、中、中細、細、極細の７種に相対的に分類した。それぞれの条線の太さの目安として、極太を３㎜以上、太を2.5㎜前後、中太を２㎜前後、中を1.5㎜前後、中細を１㎜前後、細を0.7㎜前後、極細をそれ以下としている。

（６）当地における円筒埴輪の成形技法についてはまだ十分な検討が行われておらず不明な点が多い。後述するように、築山Ｋ類や山代二子塚古墳の３条４段円筒埴輪の中には複数回の粘土紐積み上げ工程単位を示唆する資料が存在し、当地の古墳時代後期の円筒埴輪には複数の技術系統が併存していた可能性も考慮される。

（７）後述するように、突帯下向き特徴を持つ東淵寺Ｂ・Ｄ類は突帯上向きの東淵寺Ａ類と、刷毛目兄弟工具の共有や工具の賃借が認められる点から同一グループに属する工人集団による製品と想定され、その意味で突帯の向きが大別すべき技術的系譜の相違の基づく差異とはやや考えにくい。

（８）平成14年度に松江市教育委員会が実施した後円部南側のトレンチでは、人物埴輪や動物形埴輪などの形象埴輪が出土している。今回松江市まちづくり文化財課のご厚意で実見したが、刷毛目については遺存状況が悪く、刷毛目類型の同定までには至っていない。

（９）ここで古○-○としたものは、島根県古代文化センター1999の挿図番号資料を示す。その他は総て出雲市教育委員会2004の挿図番号を示す。

（10）44-26の基底部は外傾接合で、いわゆる倒立技法によって製作された可能性がある。ただし同類型の他の個体も同様か否かは確認できていない。

（11）同じ古墳時代後期の下総型埴輪の場合は、全長30ｍの前方後円墳である千葉県西の原１号墳で17名程度の工人の存在が想定されている（犬木2005）。

（12）表２の属性表備考欄に高橋2004の色調分類を併記しているので、今回の分類結果との対応関係を参照されたい。

（13）この場合、これらの工人群は埴輪の成形から焼成までを一貫して担当していたことになる。

（14）東淵寺Ｂ類である築山20-1の突帯剥落部は10㎝程が２ヶ所あるのみであるため、現状では確認できていないだけとも考えられる。しかし築山20-2のＡ類のような凹線の有無であれば現状の剥落部でも確認できる可能性が高いと考える。

（15）この場合、口縁部長と２段目間隔が一致することから、突帯の割付は倒立時に作業面と接している口縁端部から割り付けられた可能性が想定される。

（16）当初は、赤色系製品群の胎土に特徴的に含まれる白色塊が三瓶山の火山灰であるハイカ由来の粒子で出雲平野産である可能性を想定していた。しかし、渡邉正巳氏の御教示によれば、この白色塊はハイカではなく凝灰岩由来の岩屑であり、出雲平野・意宇平野周辺のどちらの可能性もあるとのことであった。

（17）なお、築山Ｋ類は突帯下半に段を有するＭ上４類を大きな特徴とする類型だが、本文中で述べたように還元色を呈する個体の存在や倒立ハケ技法が認められるなど、赤色系工人群の各類型より若干先行する要素を備えている。同様な特徴を有する突帯は、手間古墳や山代二子塚古墳出土資料の中にも散見され、東淵寺古墳出土資料の中にも同様な特徴の突帯で還元色を呈する資料が１点存在する（66-9；ｉ類）。詳細は今後の検討に委ねたい。

（18）田中大氏の御教示による。

（19）かつて筆者は、築山古墳出土の出雲型子持壺の型式学的特徴から、これを出雲東部勢力に組み込まれた結果と見る佐古和枝の主張（佐古1994）を批判したが（池淵2004）、今回の埴輪の検討を踏まえ、旧説を再度見直す必要があると感じている。

【文献一覧】

熱田貴保1989「⑶埴輪」『古曽志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会

池淵俊一2004「出雲型子持壷の変遷とその背景」『考古論集 河瀬正利先生退官記念論集』河瀬正利先生退官記念事業会

池淵俊一2016a「出雲東部における魚見塚古墳・東淵寺古墳の歴史的位置」『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書』島根県教育委員会

池淵俊一2016b「東淵寺古墳の築造時期について」『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書』島根県教育委員会

出雲市教育委員会1986『塩冶地区遺跡分調査Ⅰ』

出雲市教育委員会2004『上塩冶築山古墳』

出雲市教育委員会2006『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集』

犬木　努1995「下総型埴輪基礎考－埴輪同工品論序説－」『埴輪研究会誌』第1号 埴輪研究会

犬木　努2002「埴輪同工品論の現在」『季刊考古学』第79号 雄山閣

犬木　努2005「下総型埴輪再論－同工品識別の先にあるもの－」『埴輪研究会誌』第9号 埴輪研究会

犬木　努2007「同工品論から見た下総型埴輪の内と外」『埴輪論考Ⅰ』大阪大谷大学博物館

犬木　努2013「埴輪同工品論拾遺」『中四研だより』第31号　中国四国前方後円墳研究会

井上寛光1983「出雲の円筒埴輪」『松江考古』第5号 松江考古談話会

井上義也2011「北部九州における埴輪工人の復元に関する諸例－ハケメの観察を中心に－」『古文化談叢』第65集 九州古文化研究会

岩本真実2016「出土須恵器からみた魚見塚古墳・東淵寺古墳の年代的位置づけ」『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書』島根県教育委員会

大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

大谷晃二1997「出雲国の支配者たち」『古代出雲文化展図録』朝日新聞社・島根県教育委員会

大谷晃二1999「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター

大谷晃二2003「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター

小栗明彦1992「埴輪倒立技法の問題」『史学研究集録』第17号　國學院大學

小野本　敦2007「古墳時代中期における埴輪生産組織の一様相」『古代』第120号 早稲田大学考古学会

樫田　誠1992「埴輪の分析」『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』小松市教育委員会

加藤一郎2011「円筒埴輪について」『御廟山古墳（GBY-6）発掘調査報告書 百舌鳥古墳群の調査５』堺市教育委員会

加藤一郎2012「赤井谷１号横穴墓の埴輪とコナベ古墳の埴輪」『埴輪研究会誌』第16号　埴輪研究会

川西宏幸1977「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第２巻第４号 大阪文化財センター

木立雅朗2003「「刷毛目」調整と工具の基礎的研究1」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会

小橋健司2005「山倉１号墳出土埴輪から見た生出塚遺跡」『埴輪研究会誌』第９号 埴輪研究会

坂本豊治2012「須恵器からみた中村１号墳」『中村１号墳』出雲市教育委員会

佐古和枝1994「出雲型子持壷について」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅥ

島根県古代文化センター1999『上塩冶築山古墳の研究』

島根県教育委員会2016『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書』

城倉正祥2005「同工品識別による埴輪製作組織の復元」『埴輪研究会誌』第９号　埴輪研究会

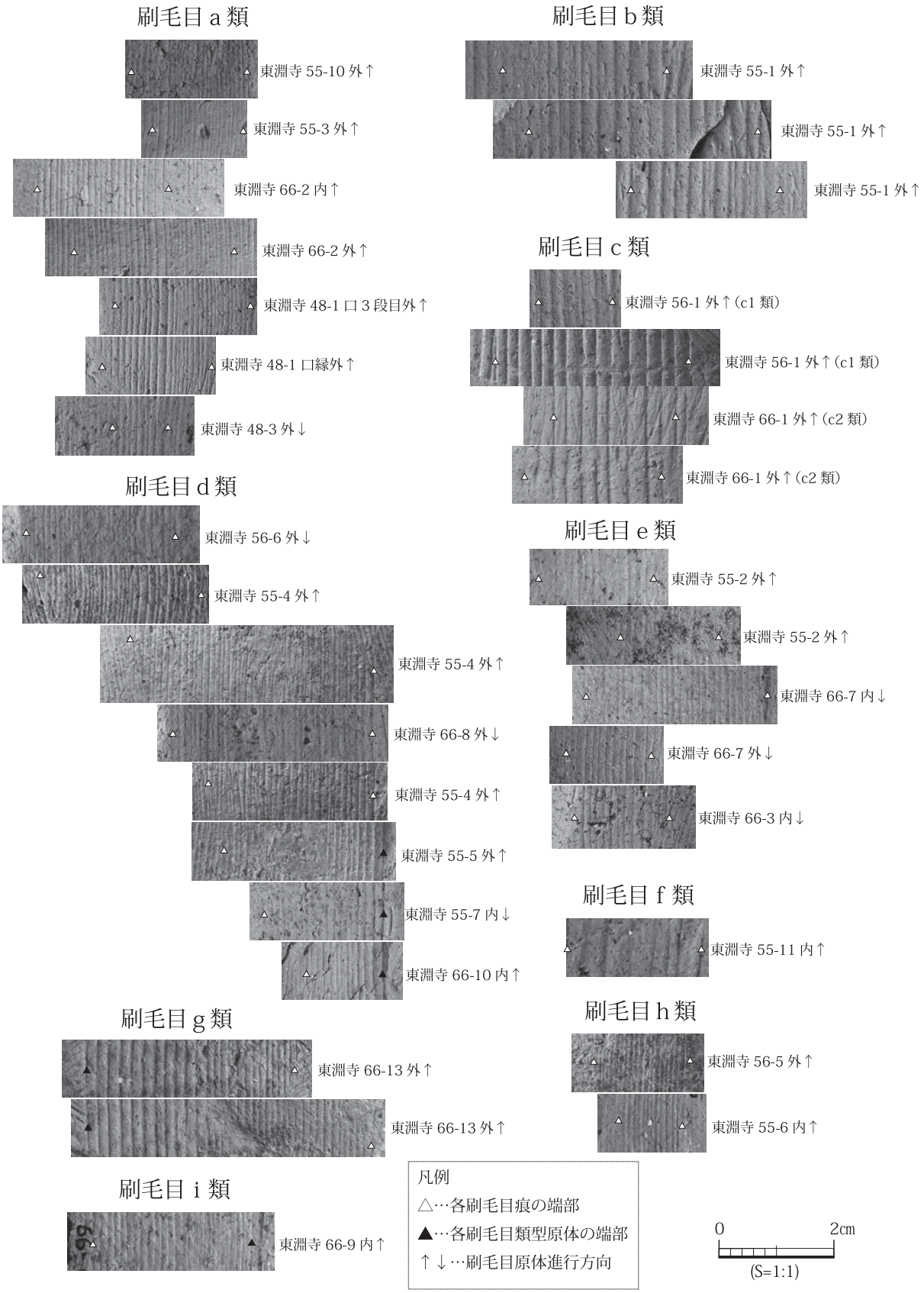
城倉正祥2009『埴輪生産と地域社会』学生社

高橋克壽1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第２号 考古学研究会

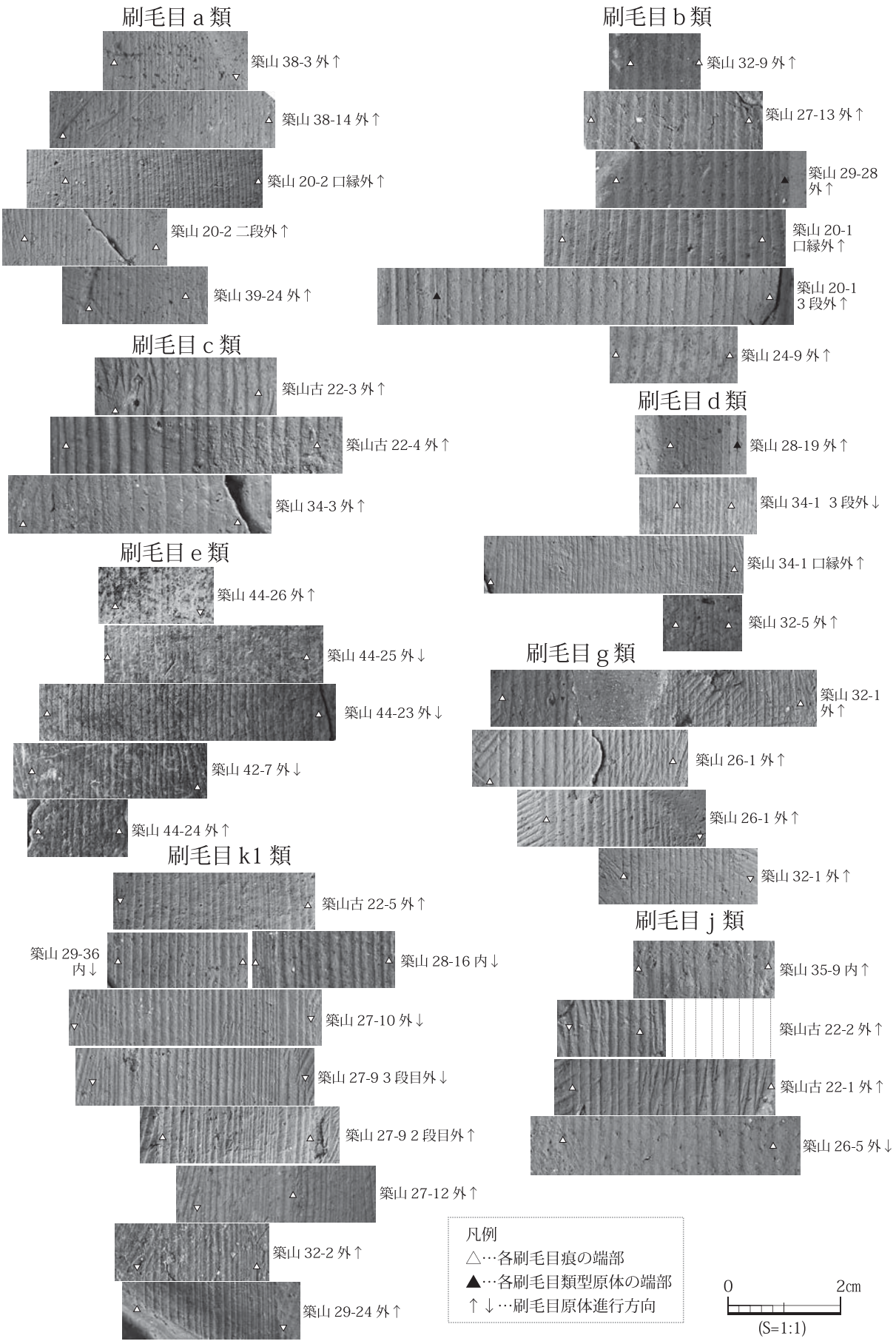
高橋智也2004「上塩冶築山古墳出土の円筒埴輪について」『上塩冶築山古墳』出雲市教育委員会

田中　大2012「山陰地方における古墳時代後期円筒埴輪の様相」『後期埴輪の特質とその地域的展開　中国

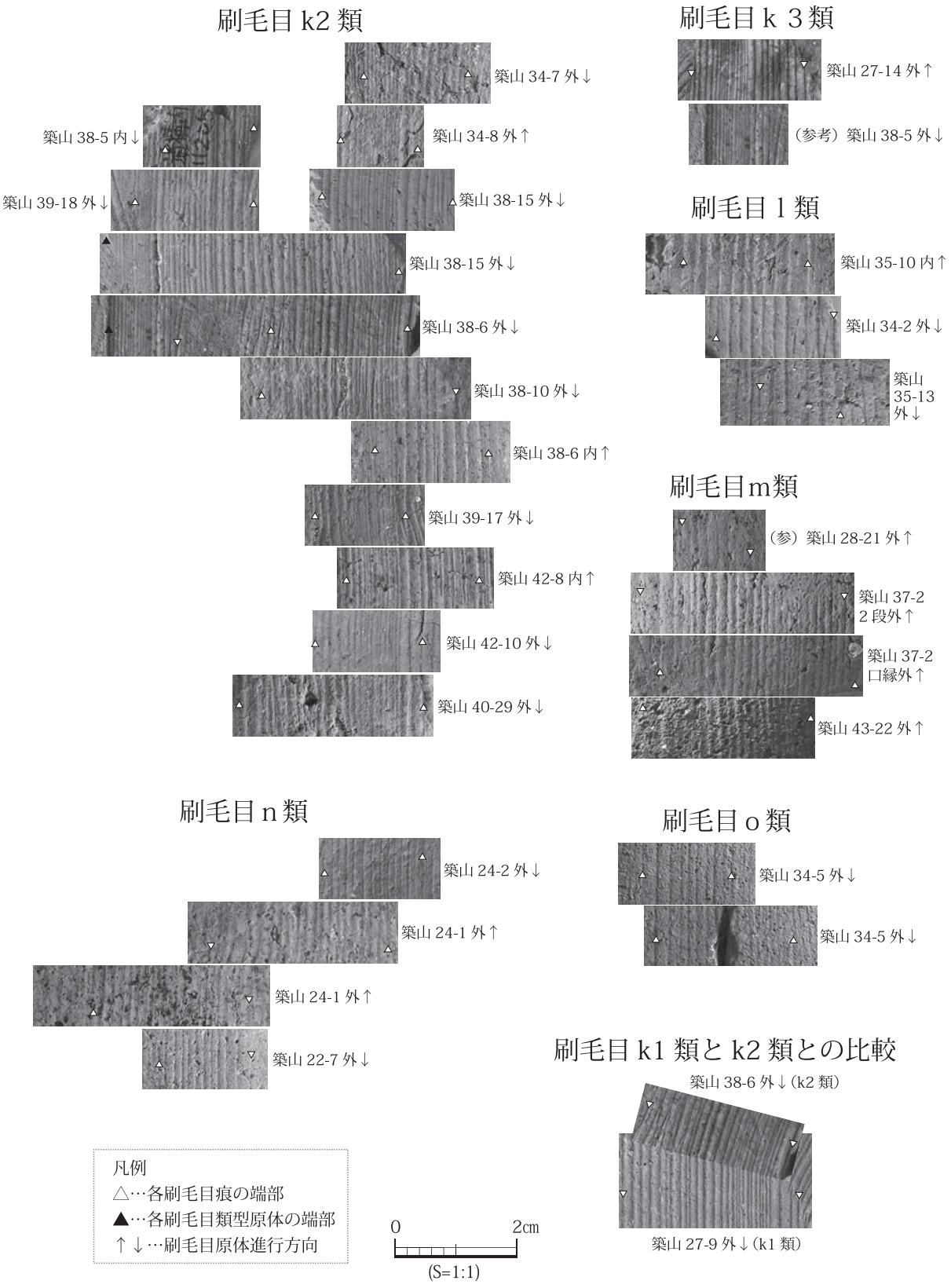
四国前方後円墳研究会 第15回研究集会』中国四国前方後円墳研究会
田中智子2013「古墳時代後期の埴輪生産・供給体制の実像をめぐって」『立命館大学考古学論集』Ⅵ
椿　真治2008「出雲東部地域における埴輪出土古墳・中期後半を中心として」『古代文化』59-4
轟俊二郎1973『埴輪研究』第1冊
丹羽野裕1992「埴輪」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅷ－山代二子塚古墳－』
花谷　浩2015「 6 世紀後半の西部出雲の古墳」『第26回出雲古代史研究会 発表資料』出雲古代史研究会
埴輪研究会2006「第 7 回研究討議の記録」『埴輪研究会誌』第10号　埴輪研究会
廣瀬　覚2000「寺戸大塚古墳における埴輪生産組織復元にむけての予察」『向日市埋蔵文化財調査報告書第50集』㈶向日市埋蔵文化財センター
廣瀬　覚2007「巨大古墳の埴輪生産組織像－神戸市五色塚古墳の検討から－」『埴輪論考Ⅰ』大阪大谷大学博物館報告書第53冊
廣瀬　覚2015「埴輪生産組織の諸相とその背景」『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
藤井幸司2003「円筒埴輪製作技術の復元的研究」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会
藤沢　敦・江川　隆1991『菅沢 2 号墳』山形市教育委員会
藤永照隆1997「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集 島根考古学会
藤永照隆1999「第 1 節　円筒埴輪」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
山内英樹2003「埴輪研究の現状と課題～「基底部調整」をめぐる諸問題について～」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター
横山浩一1978「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第22号
渡邊貞幸1986「山代・大庭古墳群と五・六世の出雲」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会



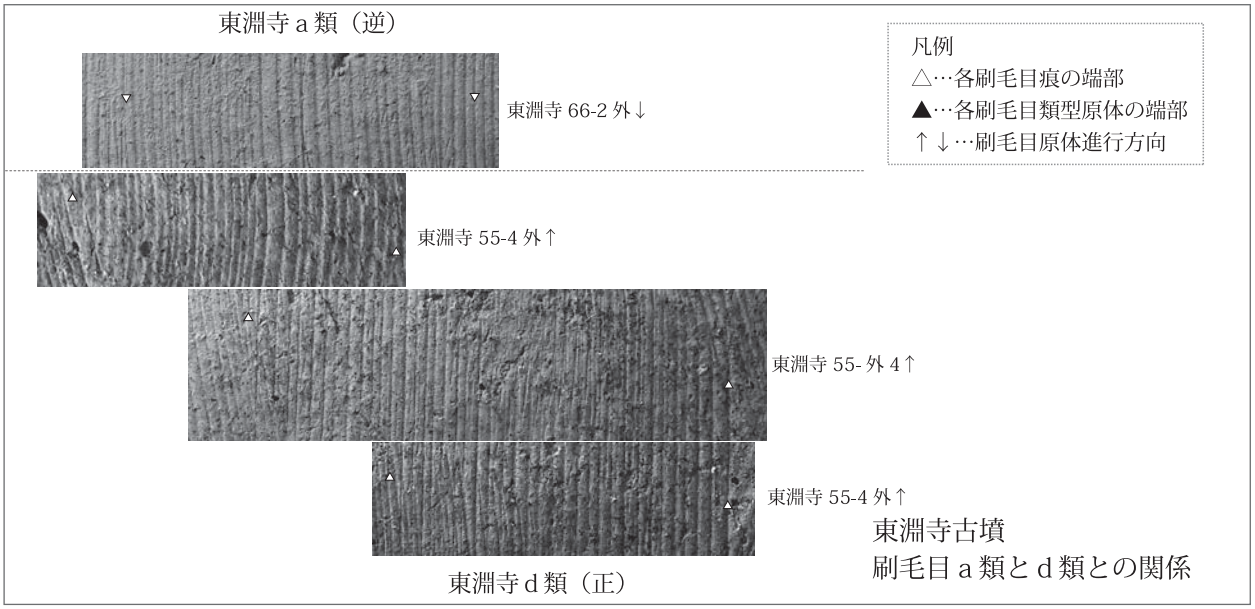
図版１　東淵寺古墳出土埴輪の刷毛目類型

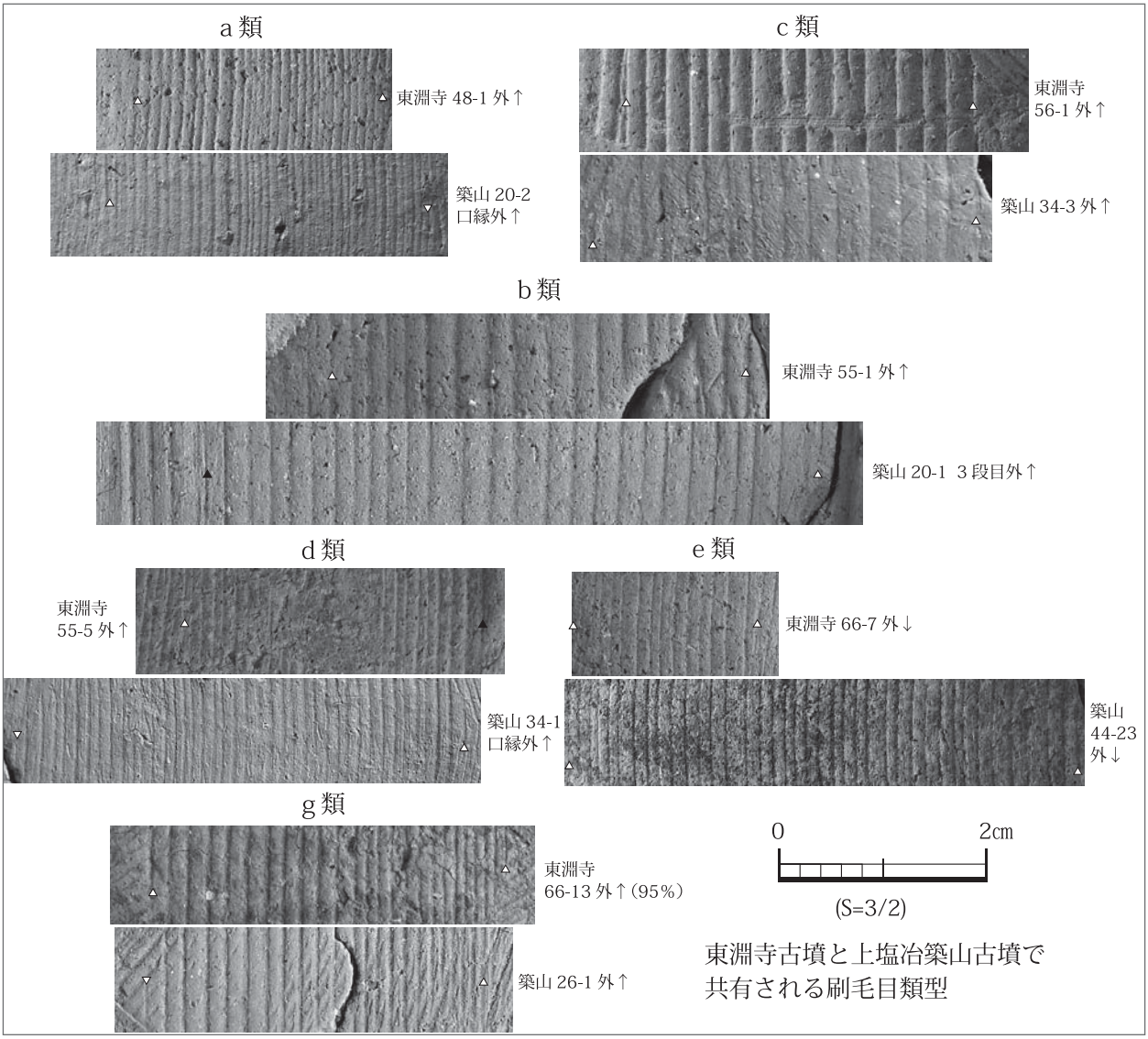


図版 2　上塩冶築山古墳出土埴輪の刷毛目類型（１）



図版 3　上塩冶築山古墳出土埴輪の刷毛目類型（２）





図版４　上；刷毛目ａ類とｄ類との関係　下；東淵寺古墳と上塩冶築山古墳で共有される刷毛目類型